転生先のサーカス団は傭兵団！？

漣　連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生先のサーカス団は傭兵団！？

【Ｎコード】
Ｎ３３６７Ｘ

【作者名】
漣　連

【あらすじ】
俺の一生は、事故という形で幕を閉じた。――そして神によってゴーシュという名で転生した。生前の記憶は残っているけど、そんなのはもう関係ない。ここが、俺の居場所。でも――それは突然に、理不尽に奪われた。今までいなかった父親に拾われて、表の顔はサーカス団。でも本当は傭兵団というとんでもない環境で生活することになった。そして、１０年後――私、ニーナは、ゴーシュにいを探す旅に出る。必ず、見つけ出す！！

登場人物紹介（前書き）

章が終わるたびに随時更新していきます！

登場人物紹介

ゴーシュ・アーバント

６歳　男

言わずと知れた本作の主人公。前世での名前は『三下　篤』（みした　あつし）。車にひかれそうになった少年をかばって死んだ。それが神の目に留まって転生することとなった。現在は傭兵。

神から『見切りの才』を与えられる。これは攻撃を見切るだけでなく、自分に迫る危機や相手の弱点やスキを察知するスキル。強すぎる力は与えないようなことを言っていたが、何故かこの才になった。

ゴーシュ・アーバント自身はこの才をあまり好ましく思っていない。何故なら守ると誓った母親をこの才のせいで見殺しにしてしまったから。この時以来、彼は感情が表に出ないようになった。

カーラ・アーバント

２９歳（享年）　女

ゴーシュの母親。ゴーシュが生まれるときに何か一悶着があったようだが詳細は謎。彼の出生には謎が多い。

ガンテ・アーバント

３６歳　男

ゴーシュの父。そしてアーバントサーカス団の団長。しかし、サーカス団は表の顔で傭兵団『三つ首の番犬（ケロベロス）』の団長。『三つ首の番犬』はヨーロッパでの傭兵団三強の一つで、彼は歴代最強、『逆鱗』の二つ名で恐れられている。この二つ名の由来は、彼の持つ豪槍からで、爆撃反応装甲の能力を持っている。攻撃が入った瞬間、うろこ状の棘が爆発。衝撃を拡散して自動的に反射する。

ニーナ・アーバント

４歳　女

ガンテの娘。ゴーシュとは異母兄妹の関係。最初はゴーシュを物陰から見る程度だったが、森で助けられてからは懐くようになった。

ガイセリック・ヴァン・ローマ

３６歳　男

ローマ王国国王。ガンテとは幼馴染。青が少し濃い空色の髪と瞳をしている。ローマ王家の血筋は皆同じ髪と瞳をしている。性格は強か。だが人見知りの娘を心配する一面も。

セレナーデ・エレナ・ローマ

５歳　女

ローマ国王の一人娘。引っ込み思案で人見知りな性格。国王からの依頼でゴーシュと出会った。どうやらゴーシュの事が気になっている様子。

ハイランド・ズーク・ローマ

２５歳　男

突如現れた王位継承者。継承指名権の存在からセレナーデを殺そうと企む。が、ゴーシュに惨殺される。高価な魔導書を持っていたようだが、何故持っていたかは謎である。

傲岸不遜な性格をしている。

神

ゴーシュを転生させた張本人。ゴーシュを絶望させたり、彼の故郷を襲った人物を教えたりと行動に不可解な点が多い。

俺、死ぬ。（前書き）

他に執筆中の小説があるけど、どういても違う作品を書きたくてやっちゃいました（汗）

よかったら、応援して下さい。

俺、死ぬ。

俺は大きくあくびをしながら高校の校門をくぐった。今日も眠いね。

「おっす、篤(あつし)。どっか寄り道しねぇか？」

「誠(まこと)か。いいな、どこいく？」

「ゲーセン行こうぜゲーセン。２丁目のとこの」

「オッケー」

あ、どうもみなさん。三下篤(みしたあつし)だ。え、誰に言ってんだって？はは、それがわかったら苦労しない。俺が生を受けて１６年。可もなく不可もなく平凡に生きこれからも平凡であり続けるだろう今を時めく高校生だ。

部活は帰宅部、エースやっとります。

「はー、今日もめんどくさい授業だったな。あんなのどこで使うっていうんだろうな」

「さぁ、大学受験じゃねぇか？」

俺は親友の言葉にありきたりな答えを返す。

「かー、高校生は辛いねぇ。もっと役立つこと教えてくれたらいいのに」

「例えば？」

「彼女の作り方とか」

「アホか」

はぁ、コイツはいつもいつもこんなことを言ってる。隣のクラスの七海ちゃんが気になっている、という情報はすでに全クラスに知れ渡っている。俺が流したからだが。まぁ、七海ちゃんの方も気になっているそうだからゴールインは近いだろ。

「しっかし誘った俺が言うのもなんだが、お前がゲーセンに付き合うなんて珍しいな」

「なんとなくだよ、なんとなく」

そう、それは俺自身も思っていたところだ。寄り道はする方だがゲーセンは本当に久しぶりだ。なんでだろうな？

「ま、久しぶりにコテンパンにしてやるぜ」

「言ってろ」

俺たちは赤になった信号で止まる。ふと、何気なく隣の横断歩道を見ると、赤い風船を嬉しそうに持った男の子が歩いていた。

その時、強い風が吹いた。男の子は風に煽られた風船を手放してしまう。

ギャリギャリギャリ！！

すると、ものすごいスピードで車が走ってきた。赤信号なのに、だ。進行方向には…ヤバい！！

俺はとっさに男の子の方に走り出す。男の子は風船の方に気を取られて車に気付いていない…！

（間に合え…！！）

俺は男の子を歩道の方に押し出す。よしっ、間に合っ――――

――――ドン

強い衝撃と共に浮遊感が俺の身を包んだ。

やべ。俺も横断歩道に出たらあぶないじゃん。あ、じめんがちかづいてく――――　――ドシャ。

全身の力が抜ける。あ、死ぬときって、痛みとか感じないんだな。おいおい、誠、何言ってんだ？もっと大きな声出せよ。聞こえないぜ。

ああ、眠く、なって　き、た　な。

――――こうして、俺の人生はあっけなく幕を

閉じた。

俺、死ぬ。（後書き）

感想とか、貰えるとうれしいです。

俺、第2の人生へ。

ここはどこだ？

一面、真っ白な空間。奥行きも高さも深さもない変な空間に、俺は気付いたら佇(たたず)んでいた。とりあえず、どこかに行きつくかと歩いてみる。

すると、フッとどこからか革張りのソファーが現れた。

「うわっ！？」

はー、驚いた。突然出てくるんだもん。バクバク鳴る心臓をなだめながらゆっくりソファーに近づく。おお、なんという張り具合。一級品のソファーだな。

「じゃなくて！」

独りつっこみ。虚しい。

「俺って、死んだん、だよな…」

『その通り』

「へ？」

俺は独り言に返事があったことに驚きの声を出した。

『まぁそんなに驚かずに。そこのソファーにでも座りたまえ』

…とりあえず、天の声（？）に従ってソファーに座ることにした。何もすることないし。

『やあやあ、驚かせて悪かったね。私は神、みたいなことをやってる者だ。生前の君の様子はずっと見させて貰っていたよ』

おい！プライバシーの問題は！？

『はは、神にそんなの関係ないね。安心しなよ、見たくもない所はカットしてるから』

「て、何人の心読んでんだ！」

『これくらいできなきゃ神じゃないだろ？ささやかな証明だと思ってくれたまえ。ああ、ちなみに君の前に現れないのは結構神って仕事は忙しくてね。失礼だがこうやって別のところから会話しているんだ。勘弁してね』

俺がまさに思っていたことにありがたくも返事を下さりやがった。…こうなったら相手が神、もしくはそれに匹敵する存在なのは納得するしかないだろう。

『理解が早くて助かるよ。さて、本来は君は死んだことで、長ーい輪廻の輪に入ってもらうのが普通なんだけど、今回は特例でね。君が助けたあの子供は将来、何万という人を助ける、ということが分かったんだ。本来ない運命が生まれたわけだね。ということで、君にささやかなプレゼントだ。さっきも言った輪廻の輪に入ってっ貰うところを、今回は特別にすぐに転生してもらうことになった』

「？それっていいことなのか？」

『もちろん。輪廻の輪に入るのは、前世の記憶を長い時をかけて消去するためなんだ。つまり、君には前世の記憶を持ったまま転生してもらうことになる』

「マジで！？」

『マジでマジで。さらにプレゼントその２。君には転生先を選べることができる。例を言うと、魔法のある世界なんかもありだね』

「おいおい、大盤振る舞いだな。いいのか、こんなに待遇を良くして」

『君が助けた子供はそれだけ価値があったってことさ。あ、最後に好きな才能を一つだけあげるよ。ま、万能の能力とかは流石にだめだけどね』

「どこまでだったらいいんだ？」

『そうだね…。高い記憶力とか、身体能力、魔法の才能程度かな。もちろん、人よりちょっとっていうぐらいだけどね』

それだけあれば十分だな。どうしようか…。。

俺は悩んだ末に見切りの才能にした。行ってみたい異世界が剣と魔法のある、スタンダートな世界だからな。ま、勇者にならなくてもいいしな、俺は。パンピー最高。

『君は欲がないんだねぇ。たいてい、身体能力とか剣や魔法の才能

とかが普通だと思うんだけど』

「剣の才能があったって、相手の剣が見えなかったら意味ないだろ。それより、早く転生させてくれよ」

うわー、ワクワクするな～。

『はいはい、それじゃ、第２の人生、行ってらっしゃい』

その言葉が聞こえると同時に、俺の視界はゆっくりブラックアウトしていった。

『ごゆっくり、ね』

俺、第2の人生へ。（後書き）

感想とかください。めっちゃ喜びます。

俺、転生する。

…。

……。

……。

……、ここ、は…？

俺は、気が付いたら真っ暗闇の中にいた。暖かい場所で、何だか和むな…。温水プールで潜ったまま息が出来たらこんな感じなんだろうな…。

……んん？温水プール？ま、まさか…！？

…　胎　内　？

いや、そんな馬鹿なことが…俺って、転生してるじゃん！！つまり、生まれ直すところから始めろってか！？あのクソ神、一言もこんなこと言ってなかったじゃねーか！

地団駄を踏みたいけど、生憎と俺は今母親の腹の中。動くことす

らままならない。生まれるまで、どのくらいだ…？

早く生まれさせてくれぇ！！

「本当にいいのか？■　■　■　■。彼女はお前の妻なんだぞ！？」

「…スマン。こんなことを頼めるのはお前しかいないんだ」

「しかし！！」

「…いいんです、■　■　■　■さん。これは、私と夫とで決めたことですから」

「カーラ！？」

「カーラ、眠っていなさい。君は出産前なんだぞ」

「ええ、分かっています」

「俺は明日の朝には出立する。中央の動きが怪しくなってきたからな。…カーラ、君と一緒に考えた通り…」

「ええ、女の子ならニーナ。男の子なら――――」

「ああ、頼んだ」

「おぎゃあ、おぎゃ、おぎゃあおぎゃあ」

「カーラ、生まれたぞ！お前の子だ！」

「どっ…ち、でした、か？」

「男だ。元気な、な」

「この子が、私とあの人の子…。女の子ならニーナ、男の子なら――――ゴーシュ。この子の名前は、ゴーシュ・アーバント」

俺、転生する。（後書き）

感想、よかったら下さい。

俺、育つ。

俺が生まれて早5年。5歳になりました。え、早い？しょーがない、しょーがない。だって作者が何も考えてないん――ゲフンゲフン。

さて、三下篤改め、ゴーシュ・アーバントっす。この世界――異世界に転生して5年か。まぁ、まずはこの世界について頭の整理を兼ねて話そうか。

まず、この世界に生まれて一番驚いたのがこの世界がもといた世界――地球とよく似ている、という所だ。母さんに黙ってこっそり今は誰も使っていない書斎に入って地図をあさってみた。するとそこには、見たことがあるような大陸の形が。

――――これ、ヨーロッパじゃん！！

どうやらこの世界は、？魔法が発達した地球？のようで、大陸の形は完全にヨーロッパのそれだった。ただ、魔法が存在しているようにここは所謂パラレルワールドみたいなもののようだ。学校で習った世界史では成功した革命が失敗していたり、戦争では敗けた国が勝っていたりした。

その点からいうと、国自体の形はもといた世界とは似ても似つかない。やっぱりここは異世界なんだとほっとしたものだ。

俺が住んでいるのは元はフランスだった場所だ。もっとも、内陸の方で周りには山しかない田舎だけどな。

次に時代背景だ。今は中世――に近い感じだな。移動するには馬とか、いかにもだろ？

なんでも、近いうちに内乱が起こるかもしれないらしい。この国の王様に反感を持っている大臣たちが謀反を起こすともっぱらな噂だ。こんなど田舎にも噂が届くぐらいなんだからよっぽど悪い政治をしてんのかな？分からん。

まぁ、この村には火の粉はかからんだろう、というのが村長たち老人の考えだ。ここは何もない所だからうまみがないそうな。…堂々と言うことじゃないけどな。

なかなか大変な世の中に生まれたもんだが、この生活も慣れたらいいもんだからな。生涯平穏といこう。それが一番だ。

「ゴーシュ？ちょっといいかしら？」

ああ、今俺を呼んだ女の人が俺の母さん。カーラ・アーバントだ。栗色の髪に青い瞳。なかなかのナイスバディな母さんだ。正直、赤ん坊のころは直視できなかった。

…まぁ、分かるだろ？分かってくれ、頼む。

ちなみに俺に父親はいない。なんでもどっかいって帰ってこないままなんだ。だから、母さんは俺が守る。俺を生んでくれた大切な人だからな。

「何、母さん」

「冬に備えて薪を採って来てもらえないかしら。森にたくさん落ち

ているだろうからあなたでも十分できるわ。お願いできる？」

「お安い御用さ」

「ふふ、お願いね」

そう言って母さんは台所の方へ行ってしまった。よし、頼まれたからにはたくさん採って来るか！そうして俺は森に入るための簡単な準備――ナイフ、クマ避けの鈴なんかだ――をして森へと入っていった。

「よし、こんなもんかな」

5歳の子供にしたらこれだけ持って帰ったら十分だろう。前世の記憶があるからこういうのは効率よくできるからな。ふふふ。

よく見たら日が沈みかけていた。やっべ、集めるのに夢中で気付かなかった。暗くなる前に帰らないと。

――――ワアアアあああぁぁぁぁ！！！！

なんだ！？突然声が…もしかして、誰かが村に襲いかかってきたのか！？

「クソッ！！」

俺は集めた薪を放り捨てて村に向かって走る。村の方角からは煙も上がってきた。暖炉に火を付けるのはまだ季節外れだ。間違いない、村が襲われてる！！

「母さんっ！！」

俺は必死になって走った。間に合え、間に合え間に合え間に合え！！

こんなに子供の姿でいることがもどかしいと思ったことはない。感覚がマヒしているのか、時間が流れるのがひどく遅い気がする。

やっとのことで森を抜けて目に飛び込んできたのは――死体だった。

「グフッ！！？」

凄まじい嫌悪感が俺を襲う。胃がきゅっと締まって、たまらず思いっきり吐いた。真っ青になりながらも、息を整えようと強引に息を吸う。

ツン、と肉が焼ける匂いが俺の鼻に届いた。吐き気を必死に我慢して家を目指す。

後から思えば、俺は何とも短絡的に動いていたと思う。もしかしたら村を襲った奴がまだ潜んでいるかもしれないのに。

でも、そんなことを考える余裕なんか、俺には無かった。前世――あの時代の日本はこんな地獄絵図なんて考えられなかったから。

「はっはっはっ」

視界に移るのは物言わぬ死体になった村人たち。幼馴染のカーリー、隣のマーサおばさん、村長…。見知った顔が脳裏に次々と現れては消える。そして、母さん。

「はっはっはっ」

燃える家を縫うように抜けながら、一直線に俺の家を目指す。

すると、崩れてしまった家が見えてきた。その前に、倒れている母さんの姿が。

「母さん…！！」

俺はスライディングするように母さんの元に膝をついた。

「母さん、母さん！！目を覚まして！母さん！」

俺に強請られたからか、母さんはゆっくりと目を開いた。

「母さん！！」

「ゴー…シュ？生きてたのね…。良かった…」

「俺は大丈夫だから！とにかく、応急処置を…」

俺はうつぶせに倒れた体を持ち上げる。

そして、真っ赤に染まったお腹を見て言葉を失った。一目で、致命傷と分かる大けがだった。

これじゃあ、母さんは…！！

歯をぎゅっと噛みしめる俺の頬に、母さんは血に塗れた手をそっと添えた。

「母さん…？」

フッと母さんは笑って。

「生きて、ゴーシュ」

とさり、とその手が地面に落ちた。

「ああ…あああああ！！！」

『あーあ、死んじゃったね』

「！！」

『しっかし、酷いもんだね、人間は。よくここまで惨(むご)いことができるもんだ』

「なんで、今頃…！！」

『んー、今だから、かな？いやね、君、気付いてる？何で君だけ助かったのか。気にならない？』

「何を…言ってるんだ…？」

俺はその言葉を聞いてはいけない気がした。だけど、俺の体は金縛りにあったかのように動かない。

『君にあげた能力。見切りの才だっけ？それはね、別に剣を見切れるとか、そんな安っぽいだけの能力だけだと思う？』

「…え？」

『あー、気付いてなかったか。いや、気が付きたくないだけなのかな？それはね、己に降りかかる危機を察知する、所謂？勘？ってやつさ。野生の勘って言うでしょ？それと一緒さ』

「あ、あああ…」

『つーまーりー、君は一人で勝手に助かっちゃったってことさ。…みんなを、見捨ててさ』

「！！！」

『ごしゅーしょー様ってやつ？ま、頑張ってよ。応援してるからさ』

『あ、そうそう。君の前世の記憶も、時間と共に薄れていくからね。

言ったでしょ？そのための輪廻の輪だって』

『それじゃ、あでゅー☆』

「ああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺、育つ。（後書き）

神、惨すぎる…。

感想、よかったら下さいね。

俺、発見される。

カラン。

ある酒場に、一人の男が入ってきた。歳は３０半ばぐらいだろうか？全身を筋肉で包まれた黒髪の偉丈夫は酒場をぐるりと見渡すと、カウンター席へ座った。

「マスター、この店で一番強い酒（やつ）くれ」

重低音の効いた声を響かせる。店主であるマスターはその声に少し怯みながらも、黙って準備を始めた。男は酒を待っていると、隣から声をかけられた。

「おや、あんたはウチの町に来てるサーカス団の団長さんかい？」

「ああ、そうだ」

声をかけてきた村人に肯定の意を返す。

「明日にはこの町を出るんでね。俺は寄った町の酒場で最後の夜を過ごすのがポリシーなのさ」

二ヤリ、と笑みを返す。

「へぇ、そうなのかい。ウチの娘がえらく興奮してダンナのサーカスの内容を教えてくれたよ…。俺も見に行けばよかったかな」

「はは、また俺らが来た時にでも見に来ればいいさ」

男はマスターから酒を受け取り、一気に3分の2程飲み干す。

「くっはぁ。なぁ、一つ聞きたいことがあるんだが」

「何だい？俺に答えられることなら何でもいいよ」

「ああ、コンヴェールの村ってどこにあるか知ってるかい？最近買った地図にゃあ載ってなかったんだが」

男の質問は村人の顔を真っ青にさせた。

「…ダンナ。悪いことは言わねぇ、それだけはこの周りの村じゃあ聞いちゃあいけねぇことだ」

「何故？」

村人は周囲に聞き耳を立てている者がいないか確かめて、囁くように答えた。

「あの村は1年前に廃村になっちまったんだ。当時の内乱の余波でなぁ。今の国王軍に敗れた元国王軍がここの近くまで来ていてよ。奴ら、逃げる途中途中で町を襲ったのさ。コンヴェールはその犠牲になっちまった」

村人は乾いた唇を酒で湿らせながら続ける。

「噂じゃ、人っ子一人助からなかったらしい。今じゃすっかりあそこを通ろうとする奴はいなくなっちまった。バカと盗賊くらいしか

な」

「そうだったのか…」

男は気落ちしたかの様にグラスに残った酒を見つめた。

「ああ、そういえば…」

「ん？」

「いや、これは俺が又聞きした話なんだけどよ。なんでも、今あそこには鬼が住みついているらしい」

「鬼？」

「うん。なんでも、5、6歳くらいの姿をした白髪の鬼がいるらしい。そこを通った奴はほとんど帰って来ず、生き残った奴もまともに話が出来なくなるほど怯えて帰って来るんだ」

男はその話を聞いて椅子から勢いよく立ち上がって村人の両肩を掴んだ。

「本当か！その話は本当なのか！？」

「あ、ああ。確かに、この耳で聞いた話だよ」

男はその返事を聞くなりテーブルに金貨を置いて走り去っていった。

「…なんだったんだ、今の…」

「さぁ…」

その後、金貨に気付いた酒場にいた人々が大騒ぎすることになるのはちょっとした余談である。

「聞け、お前ら！！」

「何すか、お頭。血相変えて」

「お頭じゃねぇ、団長と呼べ」

町の外れに建てられたテントには、サーカス団の団員が思い思いの体勢でくつろいでいた。

「団長。何かあったのですか…？」

「ああ、マーカス。一大ニュースだ」

団長はそこにいる団員全員に聞こえるように、しかし興奮を抑えた声で言う。

「生きてた。あの子が」

一瞬の静寂。そして、

ワアアアアアアアアアアアアアア！！！！

団員たちは同僚の肩を叩き、お互いに喜びの声を上げる。

「それは、本当なんですか、お頭！！」

「ああ、ああ、本当だとも。きっとあの子だ。生きててくれた…！！」

「良かった！ああ、これも戦神アグイア思し召し！神よ感謝します」

「ふん！普段は神なんざ信じねぇってほざいてる奴が言うセリフじゃねぇな！」

「別に良いじゃねぇか！こんないいこと、神に今さら祈ったって一緒の事よ！」

「違いねぇ！！お前ら！今夜は飲むぞ！」

「「「オオーーー！！！！」」」

男は騒ぐ団員たちをしみじみとした気持ちで見つめていた。男も彼らと同じように内心は喜んでいる。だが、団長としての立場が彼らと混ざることを出来ないようにさせていた。

「団長…」

「マーカスか…。お前もあれに混ざってきたらどうだ？」

「私は副団長です。そんなことは出来ませんよ…。そんな歳でもないですしね」
「マーカス。明日から本業を再開するぞ」
「了解（ヤー）、団長」
後ろから、ごそごそと物音がして、一人の女の子が眠たそうに眼を擦りながらテントに入ってきた。
「パパー…。どうしたのー…？」
「ニーナ様」
「ああ、悪いな、ニーナ。起こしてしまったようだ」
「んん～…？」
「聞いて驚け。実はな、お前の兄が見つかったかもしれんのだ」
男はかがんで頭を優しく撫でながら娘――ニーナに話す。
「お兄ーちゃん？」
「ああ、そうだ。お前の、お兄ちゃんだ」
「本当？」
「本当だ」

男はニーナに優しく微笑む――それにつられてニーナも笑みを浮かべた。

俺、発見される。（後書き）

ついにタイトル通りの彼らを出せました…。

ゴーシュは新たな運命に巻き込まれていきます。

感想、誤字脱字があればお願いします。

俺、拾われる。

俺は、雨が地面を叩く音で目を覚ました。

村のみんなが死んだあの日から、1年の月日が経った。結局、誰があんなことをしたのか分からずじまいになってしまったけど、そんなことはもう俺には関係なかった。

最初の1週間はそれこそ何も手に着かずボーっとしていた。あまりもの気味の悪さに死肉をあさる獣も近寄らず、肉が腐り始めたぐらいに埋葬しなければ、と思い立った。

いかに精神が前世で死んだ16歳から繰り越しているとはいえ、腐った体を持ち運ぶ作業はかなり堪えた。

夏でなかっただけ幸いなのかもしれない。もっと腐るのが早かっただろうから。

全てが終わるのに1か月はかかった。その頃には俺の心はかなりする減っていたんだろう。作業が終わったと同時に泥のように眠った。

起きると同時に、俺は一人で生きていかなければならないことに今さらのように気が付いた。よっぽど疲れているんだろうと、疲れた笑みを浮かべた。

それからはまさに地獄のような日々だった。

隣町まで行って盗みをしたり、スリもした。食えたようじゃないカビの生えたパンにかじりつきもしたし、狼の群れと必死に戦いもした。

生き抜くためにはと、殺しもした。ここを通ろうとする行商人や旅人を襲った。

殺しの忌避感は、思ったよりも無かった。結局、あの日から俺は致命的にぶっ壊れてしまったらしい。水たまりに浮かぶ俺は、鬼のような形相をしていた。

母さんはよく俺の黒髪を父親によく似ていると言われた。だが、今は見る影もなく白髪になっていた。この時、「ああ、俺はバケモノになっちまったんだな」としか思わなかった。

今日も食えるものを探さないとな。雨がふろうが槍が降ろうが関係ない。やらなきゃ俺が死ぬだけだ。山に入って食べれる木の実を探す。この1年ですっかりこの山では俺に敵う獣はいなくなった。まさかこんな所でも見切りの才が役に立つなんてな。

俺は見晴らしの良い場所で食べることにした。雨に打たれるがここにいれば近くを通りかかる獲物がいち早く発見できるからな。

口に木の実を運びながら雨の中監視を続ける。ん？あれは…。

ピョン、と俺は立ち上がり、山を下った。何台もの幌馬車が見えたからだ。今回は大量かも知れない。

擦り切れた服に1年前から愛用している鉈――肉屋から拝借した――を隠して、うつ伏せに倒れたふりをする。近づいてきたらこれ

でブスリとするためだ。

さて、今回の得物はどんな風に殺そうか。

ガラガラガラ。

耳から幌馬車が近づいてくる音が聞こえてきた。

「どーう、どうどう」

御者の声で馬がいななきながら動きを止める。一人、こちらに近づいてきた。もっと、もっと…。

俺は心の中でタイミングを数えて、相手があと一歩、という所で素早く身を起こして鉈を振るう。

（やった！）

確実に入った。そう確信した瞬間。

ドン！！！

あり得ないほどの衝撃が俺を襲った。あまりの強さに一瞬内臓が無くなったかと思ったくらいだ。

「ケホッ、ゲホッ」

な、んだ今の…！？何も見えなかったぞ…？

「ああ、悪い。いきなり来るもんだから、手加減できなかった。悪いな、坊主」

そう人を食ったような笑みを見せる男――黒髪の偉丈夫は何でもないように笑う。

まるで手のかかる犬を宥めるように手を伸ばす。

「大丈夫か？」

俺は唇を噛みしめながら一歩下がる。コイツはだめだ。相手を間違えた…！！見切りの才が無くても分かる。コイツはバケモノだ…！

しかし、ここで引き下がったら死ぬのもあり得た。俺が逃げても、すぐに追いつかれる。どうする…！？

「団長、まずは確認をした方がよろしいかと」

！？いつの間にか後ろに人がいた。まったく気配が分からなかった…！ヤバい、ヤバいヤバい…！！

必死に逃げる方法を考える俺をしり目に、男たちは勝手に話を進めている。

「ああ！そうだった。いかんいかん、浮かれているな、どうも」

「お気持ちは分かりますが先程のはどうかと。下手をすれば死んでいましたよ、今の」

「分かっている、そんなこと。さて、本題に入ろうか、坊主」

「…俺の名前は坊主じゃない」

ぶすっとした声で反論する。さすがに精神年齢２２歳で言われてうれしい言葉じゃない。

「ああ、すまんな。謝るついでにお前の名前を当てて見せよう。なぁ、ゴーシュ・アーバント」

「…、え？」

「合っているか？」

ひどく真剣に俺に確認する。そのプレッシャーに思わず、コクンと頷いてしまった。

その瞬間。

俺はものすごい力で抱きしめられていた。

おおい！俺は男に抱きしめられて喜ぶ趣味はない！！

「やっと…、やっと見つけた…！！我が、息子よ…！！」

……。

……。

ええええええええええええええええええええええええええええええええええええっ！！！！！？？

俺、拾われる。（後書き）

感想とか、頂けるとうれしいです。

俺、傭兵になる。

俺は出された温かい紅茶を飲んでいた。薄汚れていた髪はすっかり汚れも落ち、新品のシャツのように真っ白。服も1年間で擦り切れたぼろ布ではなく、新しいシャツを着ている。

「あれ？俺こんなとこで何してるんだっけ？」

朝飯の木の実を食べてたんじゃなかったか。

「さっきのをもう忘れたんですか、若」

「忘れてねぇよ。現実逃避しただけだ。あと、俺を若って呼ぶな」

「ではゴーシュ様、で」

「すいません若でいいです」

俺は何度目になるか分からないため息をついた。後ろにいるこの細身の紳士はマーカスさん。アーバントサーカス団の副団長を務めているらしい。

何故こんな状況になっているのか。それは数十分前のことを語らないといけないだろう。

～回想～

先程の我が息子発言をぶちかましたまま、偉丈夫の男――面倒くさいからオッサン――は、俺が放心しているのをいいことに抱きしめ続けている。が、ムズムズと震えだすとガバッと身を起こして一言。

「臭いっ！！もう我慢できん！」

…は？

「あー、もうめっちゃ臭うわ―。無理無理」

鼻を摘まんで臭いを散らそうと手うちわをする。

「おいおい…。まぁ？1年の間風呂にも入ってないし？ずっとこの格好だったけどよ…」

怒りのあまりぐっと拳を握りしめる。

「仮にも！百歩譲って俺がアンタの息子だとしよう！この感動の再開の場面で言うセリフじゃあねぇよなぁ！？」

「えー？だって、臭いし。マーカスもそう思うだろ？」

「いや、今のはないっすわー…」

「あまりに呆れてぞんざいな口調になっているだとう！？」

ビックリ！て表情してんじゃねぇよ！腹立つわ！

「とりあえず、若には体を洗ってもらって、それから説明しましょ

う」

「ああ、そうだな。それがいい」

「いや、俺の意思は？」

そのまま引きずられて幌馬車の中にぶち込まれたのだった。

〜回想終了〜

俺がつい先ほどまでの事を思い出していると、オッサンがテーブルの向かいに座った。俺は居住まいを正して真正面から睨みつける。

「で？どういうことか、説明してもらおうか？」

「もちろんそのつもりだ、ゴーシュ。さて、どこから話したものかな…」

「とりあえず、オッサンが本当に俺の父親なのか。それを証明してくれなきゃ話にならねぇ」

「難しい言葉を知ってるな。証明、証明…ね。そうだな、まずはそこからだな」

「ならまずは簡単な確認からいこうか。お前の母親の名はカーラ・アーバント。そうだな？」

「イエス」

首肯。

「お前が生まれたのは今から6年前の夏。どうだ？」

「イエス」

首肯。

「そして、お前の髪は元は黒色…違うか？」

「…イエス」

…首肯。

この後さらに2、3の質問をされたが、どれも俺の肉親…つまりは父親でないと知っていないことばかりだった。どうやら、この目の前のオッサンは――父親と認めざるをえないらしい。

しかし、目の前のこの男が本当に父親なら、どうしても聞きたいことがあった。

「アンタが俺の父親だということは分かった…。なら、一つ聞きたいことがある」

「…何だ？」

「何で、母さんと一緒にいなかったんだ！？もし一緒にいたなら、こんなことにはならなかった！母さんは死ななかった！！母さんを見捨ててまで一緒にいなかった理由があれば言ってみろ！！！」

テーブルから身を乗り出して親父の襟をつかむ。

ダン！

「ぐっ」

俺はすぐにマーカスさんにテーブルに押し倒された。

「たとえ若でもそれ以上の狼藉は許しませんよ。団長が一体どれほど苦渋の決断をされたのか、分かっているのか？」

「何だよ、決断って？母さんを見捨てた挙句、俺に強盗みたいなマネさせるようなのはよ」

俺の言葉にマーカスさんはビクリと肩を震わせる。

マーカスさんは無言で腕を振り上げた。

「待て」

ピタリ。

親父の言葉で顔面ギリギリで拳がストップする。

「ゴーシュが言うことも尤もだ…。だから、腕を下せ」

マーカスさんは無言で腕を下し、そのまま部屋から出て行った。

「スマンな」

「…別に。それで、理由は？」

「ああ…。それは、俺が傭兵だったからさ」

「傭兵…！？」

「アーバントサーカス団は表の顔さ…。傭兵団が裏の顔。『三つ首（ケロ）の番犬（ベロス）』。それがこの傭兵団の名だ。俺が傭兵だったばっかりに、離婚せざるをえなかったのさ」

「当時は、まだ親父――お前の祖父だな――が団長でな。その時、カーラに出会った。一目ぼれさ。だが、傭兵ってのは一度なるとそう簡単に足を洗うことは出来ない。カーラと、お前を危険な目に合わせたくなかった。だから、離婚した」

「今から思えば、危険でも一緒にいれば良かったと思ってるよ…。カーラはそれでもいい、と言ってくれたのにな…」

「町が襲われたことを知ったのはつい最近だ。手前の町で、お前らしき存在が生きているのを知ったから、急いでここに来た、って訳だ」

「そう、だったのか…」

俺は親父が言ったことに嘘が無いか、じっくり吟味した。今のところ矛盾はないし、嘘をついているようには見えない。

…それに親父は気が付いてないと思っているだろうけど、握りしめた手から血が流れているのが分かった。多分、自分自身に怒っているんだろうな…。

俺は一つの事を決心した。

「親父」

「なんだ？ついに俺の事をパパと呼ぶことを決心したのか？ダディでも可」

「死ね」

「ええ！？」

いやいや、そうじゃなく。

「俺を傭兵団に入れてくれ」

俺、傭兵になる。（後書き）

ゴーシュ、ついに決心します。血に塗れた、茨の道を進むことを…。

感想、お待ちしてます。

さらば、懐かしき日々。（前書き）

基本的にサブタイトルに「俺、～。」以外の場合は章が変わるようにしています。

それと、この小説のＰＶが早くも１８００を突破。…別の小説の方よりはるかに早い。

本当にありがとうございます！！

さらば、懐かしき日々。

俺は家の前に立っていた。傭兵になる、と宣言してから2日。親父は最初は驚いていたが、俺の決心が堅いと分かると、すぐに了承した。

傭兵団の団長というだけあって、割り切りはいいのかもしれないな。

俺がまだ村にいるのは、村中に隠していた大切なものを回収していたからだ。もちろん、母さんにの墓の前でこのことを報告した。

母さんは呆れているだろうか？怒っているだろうか？あんがい、「血は争えないわね」と、苦笑するだけかもしれない。結構、抜けてるところがあったからな。

最後に、俺は母さんの部屋に隠していた物を書斎の本棚の裏から取り出した。手のひらに収まるくらいの小箱。これには、母さんの結婚指輪が収まっている。

母さんはいつもこの指輪を身に着けていた。とても、大切なものだったんだろう。

そっと、蓋を開ける。そこには、銀色に輝く1つのリングがあった。内側には、《GからKへ》と彫ってあった。

俺はチェーンを通して、首にかける。俺はしばらくの間部屋を眺めていたが、なにも感傷めいたものはなかった。

感情が、希薄になっているのかな？母さんのこと以外、心が動く、ということは永遠に無い気がした。

そういえば、あの糞ッたれな神が言っていた、前世の記憶のことだが、どうやら本当に消えてなくなっているらしい。といっても、俺が今まで生きてきた年月分の記憶が、前世の記憶を押し潰している、という感じだ。

ゲームデータを上書きする感じと言えば分りやすいかな？前世のAという記憶を今のBという記憶が侵食している…。きっと、前世で死んだ時と同じ１６歳で、完全に記憶が無くなるだろう。

まぁ、もう俺にはもうどうでもいいことだけど。

俺は家を出て、最後の仕上げをする。

マッチを一本。シュッと火を付けて家に放り捨てる。マッチが家に触れた瞬間、そこから青い炎がシミのように広がっていった。

村中から集めた油を、家にぶちまけてたからな。

これで…帰る家は無くなった。ここからは、傭兵として生きてゆく。そのための、いわば誓いだ。

ここには、もう2度と帰ってくることはないだろう。

ああ、家を出るんだったらこう言わなきゃな。

「行ってきます」

さらば、懐かしき日々。（後書き）

次の更新は、少し遅れそうです（汗）

今回も遅れてすいません…。

俺、修行する。

傭兵になる、と言ったところですぐにはいそうですか。という訳にはいかないらしい。

なんでも、テストをしてどれくらいの強さか試すのが恒例らしい。

けど、俺はこのテストを受けることは無かった。親父が言うには、俺は並みの傭兵よりは強い次元にいるとか。

まあ、気配の殺し方とか、戦い方は全部この1年間で学んだことだからな。…じゃないと生き残れなかったし。このことを言ったら親父は何とも言えない複雑な表情をしていた。

「改めて、俺がこの傭兵団の団長、ガンテ・アーバントだ。よろしくな」

「ああ、よろしく」

「さて、早速だがお前にはテストの必要性は無いからな。と、言っても今のままじゃあ戦場に出てもすぐに死ぬだけだ。という訳で、お前には修行をしてもらうことになった」

「修行？まあ、分からなくもないけど…。どんなことするんだよ」

「なぁに、簡単なことさ。これから1か月、お前を殺しにかかる。その間、生き残れたら修行終了だ」

「はぁ！？」

何言っちゃってんの、このオッサン。頭イッテんじゃねぇの！？

「そこまで言わなくても…」

あ、声に出してた。ま、いっか。

「はぁ…。傭兵にとって絶対なもの。それは？強さ？だ。それ以外はいらないと言ってもいい。ようするに、サバイバルをしろってことだ」

今までもやってきたんですけど？

「顔に出ているぞ。…俺が言ってるのはなにも腕っ節の強さだけじゃない。毒物の知識。トラップの有無を察知できるか。相手の力量を見極める目。などなど…。要するに危機管理能力の修行だ。傭兵にとって大切なのはそこだ」

「お前は今まで？野生？しか敵はいなかった。しかし、これからは違う。悪意も敵意も害意も殺意もある、？人間？が相手だ。勝手が違うんだよ」

なるほど…。確かに、俺はそういう方面は全然分からないからな。

「それと、もう一つある」

「ん？」

親父は手招きをして誰かを呼ぶ。すると、部屋の外から一人の女

の子が出てきた。親父と同じ黒髪の、目がクリッとしたかわいい娘だ。

「こいつ、俺の娘のニーナ」

「は？」

え？

「つまり、お前の妹な」

え、え？

「修行の間、こいつの面倒を見ろよ？」

え、え、え？

「ニーナが死んだらお前を殺すからな」

……。

はいいいいいい！！？？

俺、修行する。（後書き）

ゴーシュに衝撃の新事実！

（このムサいオッサンのどこを取ったらこんな娘が出来んのー！！？）

そっちか！

俺、雇われる。

俺たちアーバントサーカス団は、1か月の旅路を経て国王、ガイセリック・ヴァン・ローマ？世が統治する、ローマ王国に到着した。

え？時間の流れが早い上になんでサーカス団なんだって？それにはもちろん、理由がある。

あえて問うが、1カ月にも及ぶ修行をだらだらと書き連ねた駄文を皆さんは飽きずに読めるだろうか？いや、読めない。（反語）その時のもろもろは近いうちにおまけでも書くんじゃねーの？そういう声があったら書くかもね。

さて、メタ発言に続けて、何故サーカス団かと言うと、真正面から「俺たちは傭兵です」、なんて言ったら、まず、入国を丁重にお断りをお願いされるだろう。武力的に。

まぁそんなことがあっても負けることはまずないが、自分たちの方から厄介の種をまく必要はない。だからサーカス団と言って正体を偽る必要性があるのだ。

ちなみに今回はサーカス団としてやって来たのではなく、仕事でここ、ローマに来た。親父に今回の雇い主（クライアント）について聞いてみたがはぐらかされるばかりだった。守秘義務ってやつかもしれないな。まぁ、当たり前か。

「ねぇねぇ、ゴーシュにぃ。ローマってどんなとこなの？」

俺は幌馬車の中からボーっと外を眺めていたが、服の袖をクイクイッと引かれるのに気が付いてニーナの方を振り返った。

ニーナは黒髪をした目がクリッとしたかわいい女の子で、俺の妹に当たる。妹と言っても異母兄弟だがな。親父に問いただしたところ、母さんと離婚した2年後に？やっちゃった？らしく。

親父の言い訳によると『俺に惚れた女が迫ってきて、女がいると断ったにも関わらず、親父の事を諦められずに酒で泥酔させられたんだ。結局、女は自殺してニーナだけが残った』と、言っていた。

流石にニーナを一人にするのは忍びなく引き取ったらしい。

げに恐ろしきは女の執念か。とにかく、血は半分しか繋がっていなくても俺の妹なのには変わりがない。最初は俺に近寄る素振りすら見せなかったがある日突然俺に懐いてきた。

その日は親父に八つ当たりという名の奇襲を受けて散々だったが（その後ニーナに、「ゴーシュにぃをいじめないで！」と言われて親父はしゅんとしていた）。

「ああ、ローマは王様がいる国でね、この辺りじゃ一番大きな国じゃないかな」

「へぇ～」

口を大きく開けて感心したように目を輝かせる。

そこに、親父が俺を呼ぶ声が聞こえた。俺は「また後でな」とニーナの頭を一撫でして親父の元へ向かう。

「馬車を停めたら王城へ行く。お前もついて来い」

「はぁ？なんで？」

「行けば分かる」

親父は意味深に笑って団員に指示を飛ばしに行った。

一体何なんだろうか？

俺は親父と連れられて王城の玉座の間にいた。親父が門番に名を告げ、門番が不審人物を見るようにそのことを伝えに行った。

門番が顔を青くしてぎくしゃくした動きで戻ってきたときは驚いたが。

俺はまさか国王本人と会うことになるとは露とも思わず、伸ばした髪を一纏めにして（ニーナは俺の髪を切ることを断固として却下した）、白のシャツにズボンと、みすぼらしくはないが国王に会うのには絶対にこれじゃダメだろ、という感じだ。

ちなみに親父はシャツに皮のジャケット、あと普通のズボンと戦闘する時の格好となんら違いがなかった。

「国王のおなーりー！」

部屋の隅にいる兵士が国王の入室を告げる。俺と親父は膝たちに顔を伏せ（臣下とか忠信の意味があるそうだ）、国王が入ってくるのを待つ。ザッザッという足音の後、玉座に座る気配。

「面を会げよ」

テノールの効いた渋い声が頭の上から聞こえた。俺たちはその声で顔を上げる。

正面には、屈強な肉体をした強面の王冠をかぶったオッサ…。ごほん、国王がいた。何あれ、思考読んだのか？まぁ、俺も空気を読むのだ。

「久しぶりだな、ガイ」

親父空気読めよもー！！何気軽に言っちゃってんの！？国王だよ！！？

「ふん、今ではそう気軽に俺を呼んでくれるのはお前くらいだな、ガンテ」

めっちゃ親しげー！？

「こいつ、俺と幼馴染なんだよ」

親父、国王相手にこいつって言ったよ！ちょっと、国王も何笑ってんの！？

「驚かしてすまないね、ゴーシュ君。君のことはガンテから聞いているよ」

親父、何言った…？

やべ、殺気出た。

「はは、いや、ただ単に今回は君たちに依頼がある、ということだけだよ」

「い、依頼…？」

俺の疑問に親父は頷く。

「ああ、今回はちょっとばかし厄介なことがらでな」

「うん、ガンテの言う通り。実は自分、命狙われてるんだよねー」

さらっと何言ってんのこの国王（ひと）！？

しかし、周りにいる兵士に動揺などはない。そのことを不思議に思っていると、国王は困ったように苦笑した。

「君が疑問に思うのも無理はない。実は前から命を狙われていてね」

「…そんなこと、部外者においそれと言っていいんですか？」

「ガンテとは知らない仲じゃないからね」

「じゃあ、俺がスパイだったら？」

俺の発言にポカン、として。

「あっはっはっはっはっはっはっ！！」

国王は腹を抱えて大笑いをした。そんなに傑作だったか？

「ああ、そうだな！その通りだ！君は面白いな」

これだけ大笑いされたら誰だって憮然とした気持ちになる。そりゃどうも、と俺は返事を返した。

「うん、ガンテが言っていた通りだ！本当に無表情で普通の受け答えしている！」

笑うポイントそこかよぉ！！あの日から感情が表に出ないんだよ、ほっとけ！

「うんうん、君になら安心して任せられるな」

国王はうんうん頷きながら、ニッコリ笑った。嫌な予感がするんだけど……。

「君に、娘の護衛を頼みたいんだ」

……嘘ん。

俺、雇われる。（後書き）

何かあれば、感想を下さい！

俺、仲良くなる。

「幻聴が聞こえた気がするので、もう一度言ってくれませんか？」

「うん、娘を護衛してくれない？」

うんっ！幻聴じゃないや！

「じゃなくて！何で俺なんですか！？」

「いや、君と歳も近いし、あの子、人見知りで友達もいないんだよ。良かったら友達になってくれないかな？」

一介の、しかも傭兵（しかも子供に）頼むことじゃねぇー！

「諦めろ、こいつは本気だ。質の悪いことにな」

親父がポンポン、と俺の肩を叩く。

「雇われ者は、雇い主（クライアント）には一生勝てねぇよ」

俺はがっくりと肩を落とした。

しかし、親父はこうなること分かってたっぽいな…。城に来る前に意味ありげに笑ってたし…。

俺は、別館へと続く廊下を歩いていた。親父とローマ国王は今後の警備体制について話をする、ということで俺は部屋から放り出された。

親父の言うとおり、雇い主の意向は絶対なわけだから、俺が不平不満を言ったところで何かが変わるわけじゃない。

それなら、ちゃっちゃと依頼内容を済ませた方がいいだろう。

しかし、生前の俺ですら女子とは会話をあまりしなかったからな。歳は一つ下のようだけど、果たして上手くいくか…。

俺はため息を付きながら歩みを進めた。なんでも、今の時間帯はたいてい中庭にいることが多いらしい。それだったらと教えられた通りに中庭に行ってるんだけど…。ここ、どこ?

「まいったな…。道が分からなくなった」

無駄に広いよ…王城って。迷路みたいだし。

俺はうんうん唸りながら道筋を思い出そうとする。

「あの…」

ソプラノのきれいな声。ローマ国王の時も思ったけど、この国の人は声が良いな。

俺は後ろを振り向くと（考えるのに夢中で後ろまで気配を読めなかった。修行が足りないな）、そこに俺より少し背が低い女の子がいた。ローマ国王と同じ青が少し濃い空色の髪を肩まで伸ばしている。それと、同色の瞳。正直、かなりかわいかった。

もしかしてこの子が…。

「あの、お困りですか？」

この子がローマ国王の娘だろう。なんせ同じ髪の色だし。

「君は？」

「あ、えと、その」

「ごめん、先にこっちの名前だよな。俺はゴーシュ・アーバントだ。今日は親父が国王陛下と話があるから、城に来たんだ」

「わ、私は、セレナーデ・エレナ・ローマ、です」

やっぱり。

「セレナーデか…。セレナって呼んでいいか？」

「え？」

「いや、長いから覚えにくいし」

あ、落ち込んだ。フォローフォロー。

「それに」

続く俺の声に顔を上げる。

「君とは、友達になりたいから」

「あ…」

スッと右手を出す。

「握手、しよう」

「う、うん」

ちょっと顔を赤らめながら、俺と彼女は握手する。

「で、返事を聞いてないんだけど」

「あ、はい」

「よろしく、セレナ」

「はいっ！」

俺たちは互いに頷きあった。

この時、セレナは顔が赤かったけど、恥ずかしかったんだろうか？わからん。

俺、仲良くなる。（後書き）

眠いよー…。ぐぅ。

俺、仲良くなる。2

ここで立ち話はどうか、ということで俺たちは中庭に行くことにした。目的が前後したけどまぁ、結果オーライってことで。

中庭は、なるほど流石は天下のローマ城と唸らせるにたる物だった。様々な色、種類の花が、互いを引き立てるようにバランスよく植えられていて、見ていて心が洗われるような心地だ。

もっとも、表情には出ていないだろうが。少し残念だな、と思いつつ、中央にあるベンチに二人で腰かける。

セレナは顔をまだ赤らめていた。？熱でもあんのか？

俺はふと疑問に思ってセレナの額に手を当てる。

「ふみゃあ！？」

セレナは猫みたいな声を出して、ビクゥっ、と体を震わせた。

「あ、悪い。驚かせた？顔が赤かったから、熱がないか確かめたんだけど…」

うーん、熱くは無かったし、熱があるわけではなさそうだ。

「い、いえ。私は大丈夫です」

ぶんぶん手と頭を振るセレナ。俺は本当に大丈夫か、と思いつつ、

俺は感心していた。

「セレナって、俺とそんなに年齢が変わらないのにすごい言葉遣いが上手いよな」

そう。たとえ俺が年上だとしても、セレナは立場上、敬語なんて使う必要はないのだ。それなのにこんなに敬語が上手なのは、普段から使っている、ということなんだろう。

だが、セレナは俺が言ったことに何故か顔を青ざめさせていた。

「へ、変でしょうか…？」

上目づかいで俺を涙目で見つめる。これはっ…！想像以上に破壊力があるぞ…！？

「いや、変じゃないよ、セレナによく合ってるっていうか…。雰囲気が、かな」

セレナは一転、また顔を赤らめる。今度は嬉しそに俺を見つめて、微笑む。

俺たちは夕方になるまでずっと話し込んでいた。

俺は、中庭を赤く染める夕日に気が付いた。ちょうど西日が入るように設計されているんだろう。白い城壁に夕日の赤はとてもマッ

チしていた。

そろそろ、親父たちも話が終わっているころだろう。俺はベンチから立ち上がって背伸びをして曲がった背骨を伸ばす。

「そろそろ親父の元に戻らないとな」

俺は何気なくそう呟くと、隣から「ええっ」と声が聞こえた。声の方を振り向くと、口元に手を当てたセレナがいた。

俺が見つめていると、わたわたと手を振る。その様子が少し可笑しくかった。

「あ…」

「どうした？」

いえ、とセレナは首を振る。そのまま、セレナはにこりと花が咲くように笑った。

「ゴーシュさんが、笑うのを初めて見たから…」

俺はセレナの言葉に驚いた。表情が、顔に出た…？あの日から、一度も感情なんて表に出なかったのに…。

俺は内心の動揺を誤魔化すために、「…それを言うなら、セレナは笑うとかわいいな。さっきのは、かなり良かった」と言うことしか出来なかった。

セレナは顔を真っ赤にしてあうあうしていたが。

俺たちは親父たちがいる部屋へと戻っていった。部屋に戻るとやけに感激したローマ国王と、ニヤニヤ笑う親父たちがいたが。

不思議そうなセレナをよそに、俺は親父のすねを一発蹴っておいた。涙目の親父にローマ国王とセレナは笑い、俺はざまぁ見やがれ、と鼻息をついた。

俺、護衛する。（前書き）

お気に入り登録が９件に。

登録していただいた方、ありがとうございます。

とても励みになります！ＰＶも５０００を突破しようかというところ。

初めてづくしで狂喜乱舞状態です。

初心者で、まだまだ文章が垢抜けないですが、もっと楽しんでもらえるように、頑張っていきたいと思います！

俺、護衛する。

俺と親父は帰路についていた。セレナは俺たちが帰ることをとても残念がっていたが、俺が「また会おう」と約束すると上機嫌になった。今はローマ国王と一緒に城門から俺たちをずっと手を振って見送ってくれた。

俺はその姿に幾ばくかの罪悪感を覚えたけれど、これも仕事、と割り切って前を向く。セレナは知らないことだが、この後俺は姿が見えなくなったら取って帰って城に戻ることになっているのだ。

それまでの間に、親父から必要な情報を聞かされ、自分で整理していく。

ローマ国王の命を狙っているのは国王の息子――ハイランク・ズーク・ローマ王子だ。彼とセレナは歳の離れた異母兄妹で、彼は２０歳になる。

このビックリするほどの歳の差の理由は、俺とニーナと似ている。彼、ハイランク王子の母親は元々はローマ国王がまだ若いころに付き合った女性だったらしい。彼はつい最近城に現れ、その関係を城でぶちまけたそうだ。

ローマ国王としてはそんなことを言われれば無下に放り出せば彼が何を言うか分からない。結局、彼を監視する意味で城に置いているそうだ。

彼が急に表舞台に出てきたことも気にかかる、と国王が言ってい

たらしく、その点は俺も同感だ。何せ彼は突然出てきた――継承権第1位なのだから。

これは、国法で定められているらしく、長男が立太子の優先権を持っているらしい。

突如現れた継承権第1位の男――正直言ってかなり怪しい。さらに、この問題はエレナにも飛び火した。ハイランク王子はどうやらセレナの事を目の仇にしている。その理由は国王の継承指名権があるからだ。

確かに、法では長男が継承権第1位を与えられるわけだが、一つだけ例外がある。それが国王による継承指名権だ。これは、読んで字の如く国王が王位継承権を指名できる、というもので、これは今回のケースに当てはまるのだ。

それは、もし、後から継承権のあるものが現れたら、国王が優先権を指名してその者に与える、という内容だ。この法がある限り、ハイランク王子は継承権を無効化されてしまう訳である。

セレナはこの法があるからこそ命を狙われる可能性があるのだ。ローマ国王はその懸念を抱いたため、俺たち『三つ首の番犬（ケロベロス）』に依頼があった経緯だ。

「つまり、その法のせいでセレナは命を狙われているんだろ？だったら、国王本人が命を狙われる理由が分からない」

「ああ、おそらくこれはハイランク王子以外の人間も関わっているんだろう。あいつは、元老院の奴らが怪しい、と言っていた」

元老院は、今で言う国会議員みたいなもので、この国の有識者たちで構成されている組織だ。これは、宰相のようなもので、国王と元老院のツートップで国を動かしている。

今回の事は国王反対派の人間が協力しているのでは…というか、十中八九そうだろうな。

「親父は国王を、俺はセレナを守ればいいわけだな」

「その通り」

仕事は単純であればあるほどいい。余計なことを気にせずに済むからな。

親父から事前に準備していたあるものを預かり、いったん分かれて俺は城の裏手側に回る。セレナのメイドさんが入れてくれる手はずになっているのだ。

俺は周囲に誰もいないことを確認してから、裏門を教えられた回数、リズムを付けてノックする。

すると、一人のメイドさんが門を開けてくれた。

「ゴーシュ様でしょうか」

「はい。窓の下で愛を歌いたく参上しました」

これはセレナを護衛しに来た、という暗号だ。…もっと他は無かったんだろうか。

「こちらです」

メイドさんは手招きして城の中に入る。

さぁ、初仕事といきましょうか。

俺は身に着けた装備を確認してから、メイドさんを追って城の中に入っていった。

俺、護衛する。２

夕刻。日も暮れ、太陽が沈みかけた空を、俺は窓から眺めていた。今回の依頼内容は国王、王女の暗殺の阻止。

正直、初めての仕事でする内容ではない。だが、俺は気後れといった感情は無かった。今日初めて会って、ほんの数時間話しただけの仲だ。だが、セレナは今日こんなことを言っていた。

「お兄様は、少し恐い方だけど、家族なの。私は、仲良くなりたい」

親父に聞くまでは、こんな裏があるとは思いもよらなかったが、セレナの言葉は俺に胸に深く響いた。俺にとって、家族は守るモノだ。それを踏みにじろうとする奴は、誰だろうと許さない。

しかし、ご都合主義のように今日いきなり暗殺はしないんじゃないか、とも思ったが、どうやらローマ国王はわざわざ舞踏会を開くそうだ。つまり、わざと隙を作ってあっちから来てもらおう、というのだ。これを聞いたときはその胆力に流石は一国を治める国王だな、と思わされた。

俺は舞踏会が終わるまで案内された部屋で武器の手入れをしていた。俺の命を預ける大切なものだ。し過ぎて困ることじゃない。（ちなみに場所はセレナの部屋から一番近い部屋だ。それでも５０ｍ位離れているけど）

外から声が聞こえてきた。どうやら舞踏会が終わったらしい。暗殺するなら緊張感が緩む瞬間だ。護衛には俺たちの事は伝えてない（当然だが）。

俺はセレナが部屋に戻ってくるのを耳を澄ませて待っていた。

かつん、かつん、かつん。

広い廊下を靴が音を立てている。音は複数。どうやら護衛とセレナらしい。

「どうも、護衛ありがとうございます」

「いえ、これも我々の仕事ですので」

礼を言う声と謙遜する男の声。几帳面なやつ、と思いながらタイミングを見極めるためにドアのノブをつかむ。

「よし、我々も戻るぞ」

隊長（？）が一声かける。靴音がするがすぐに止まる。

「どうした？早くこ――」

シュッ。

「かっ――」

何か鋭いモノが肉を立つ音。

ドサッ。

「きゃあああぁぁぁーー！！」

俺は悲鳴が聞こえた瞬間、ドアを思い切り開け放った。

ドアが開く音が聞こえたのだろう。暗殺者はとっさに俺の方を振り返る。俺はそいつに持っていた投擲ナイフを手首をスナップさせて投げる。

「ぐあっ！」

ナイフは俺の目的通り腕に刺さった。暗殺者は痛みで持っていたナイフを落としてしまう。俺は痛みで怯んでいる間に走って距離を詰めて、とび蹴りを放つ。

暗殺者は俺の蹴りで吹っ飛んで行った。俺はその間にセレナの方に怪我がないか調べた。どうやらショックで気絶してしまったらしい。

この後のことを見て欲しくなかった俺は、少しほっとしてそのまま部屋の中に入れ、扉を閉める。中にはメイドさんがこっそり待機している、と打ち合わせがあったから安全だ。

俺は暗殺者の方を向く。相手は腕を掴みながら起き上っている所だった。

「ちっ！何でこんなとこにガキがいるんだよ…聞いてねぇぞ」

「俺はあんたと同じ雇われもんだ。暗殺ってのはばれたら効果は薄い…。さっさと帰った方が身のためだぜ」

「俺様が、お前と同じ…？そんなわけねぇだろ」

暗殺者は顔を隠していたマスクを剥ぎ取る。マスクの下は、セレナと同じ空色の髪と瞳を持つ青年だった。

「俺様はハイランク・ズーク・ローマ…次期、国王だぜ…？」

俺、護衛する。3（前書き）

ついに親父の実力が…！

俺、護衛する。3

「ハイランド王子か…。本人がこんな大それたことをするとはな」

俺は腰に差していた鉈――村を出るときに持ってきた物だ――をハイランドに向ける。

「だがこれも仕事。死んでも後悔すんなよ」

「ほざけ、ガキ。それに俺様は次期王だ！国王の方にも刺客を送っている！かなりの手練れをな。もうこの国は俺様のモンだ！！」

俺はハイランドのセリフにため息を付いた。ていうか、三流以下のセリフだよ。今時そんなこと言うやついないよ。

「はぁー、無理無理。親父に勝てる奴なんて、そうそういないよ」

「はぁー、暇だ。なぁガイ。何とかならんか？」

「お前はもっと緊張感を持って欲しいものだね」

ローマ国王は腕組みをしながら部屋の中をグルグルと回っている。気がかりがあってしょうがない様子だ。

「落ち着けよ、ガイ。ゴーシュはやる奴だ。お前の娘は傷一つつかんだろうよ」

「それは分かってはいるが――」

「ぎゃあ！」

「ぐはっ！？」

「おお、来たみたいだな」

バン！！と扉が開かれる。そこから5人の武装した男たちが部屋に入ってきた。

「ローマ国王！その首、貰い受ける！！」

一人の男が長剣を振りかぶる。

「あー、あー。無視すんなって」

ガンテは素早く国王と男の間に割って入り、拳で迎撃する。その一撃で男の着ていた鎧がひしゃげ、胴に拳の跡が残る。

「ぐぅ…！貴様、何者だ…！？」

「おいおい、ガンテ。手加減か？それとも腕が落ちたか？」

「何言ってんだ。ここで殺したら汚れるだろ？」

「几帳面だなぁ、お前も。いや、汚れてもいい場所だったら躊躇なく殺していたってことか？」

「ふん。お前の事だから汚れたものの代金を請求されそうな気がしてな」

「私はそこまでケチじゃない。パーッとやりたまえ」

「了解（アイアイ）」

そこでガンテは未だに攻撃する気配のない暗殺者たちに顔を向ける。

「どうした、今のは絶好のチャンスだったぞ？お前たちはやる気がないのか？」

「ガンテ…？ま、まさかガンテ・アーバント？」

ごくり、と暗殺者の一人が独り言を漏らす。

「ああ、そうだが？」

ガンテは何でもないように肯定した。

その瞬間、男たちは悲鳴を上げんとばかり喚きだす。

「き、聞いてない！こんな化け物が相手なんて、聞いてないぞ！！」

「終わりだぁ！ここで死ぬんだぁ！！」

「いやだいやだいやだ…！死にたくない死にたくない死にたくない…！！」

「どけ、早く逃げさせろ！」

「……！（ブクブク）」

あまりもの混沌具合にローマ国王はガンテに恐る恐る質問する。

「…ガンテさん？これは一体？」

「知るか」

ガンテはそう一言返すとズシッと一歩踏み出す。

「ひぃっ」

「別に、お前たちを殺したって俺の気が晴れるわけでも、ましてはこの馬鹿を助けようなんて気はさらさらねぇ」

「…！だったら」

男たちはその言葉で色めき立つ。しかし、次のガンテの言葉で地獄の底まで叩き落される。

「だが。お前たちを殺せば金になる…恨むなら、お前たちを雇った奴を恨め」

その言葉と共に、ガンテの影から豪槍が現れる。

「クソッ！！」

逃げようとしていた一人が剣を抜いてガンテに切りかかる。その動きは、確かに一流の武人の動きで無駄な動きはほとんどなかった。

突き出したガンテの槍に当たる――その瞬間。

バボッ！！と。

豪槍から凄まじい勢いで何かが放出される。

男たちがつぶった目を開くとそこには――まるで型抜き機でくり貫かれたように虫食いのある、肉片だった。

「「「「「――――――！！」」」」」

「さぁて」

ガンテは肉食獣の目――狩る側の目で暗殺者たちを見る。

「次は、どいつだ？」

俺、護衛する。3（後書き）

ガンテの武器などの詳細は章の最後にまとめます。

こうご期待？

俺、護衛する。４（前書き）

今回はかなりのグロ展開。

苦手な人は即バックを。

俺、護衛する。４

俺は慎重に一歩前に進む。目測にして距離は２０ｍ。ハイランドは腕を怪我しているから剣は振れないはず。一瞬で片が付くだろう。

しかし、ハイランドは笑みを崩さない。自分の優位が揺らがないと確信している表情だ。

（何が狙いだ…？）

俺は、ハイランドの余裕が気がかりでなかなか攻めれないでいた。

「なんだよ…。あれだけ大口叩いといて何もしねぇのか？だったら」

ハイランドは懐から一冊の古びた本を取り出す。

「こっちから行くぜ…？」

俺は思い切り床を蹴った。あれが俺の思っている通りの本だと、かなり厄介なことになる！！

だが。

「遅い」

「千の理をかき抱く偉大なる魔導書よ！汝が主の命に応え、我が敵を打ち砕く剣を遣わせよ！！」

ハイランドが呪文を唱えきると同時、床に二つ、青白く光る魔方陣が現れる。そこから、剣を持つ人形がハイランドを護るように前に出た。

「ちっ」

俺は軽く舌打ちして、そのまま突撃する。右の人形に切りかかるが、簡単に防がれる。しかも、相手は2体。俺が片方を相手していると、背中からもう一体が切りかかる。

俺は体を捻って何とか躱し、バッと後ろへ飛んで距離を取った。

「ふん、そこそこできるみたいだが…やはり、一人ではこいつらに歯が立たんか」

俺は動悸のする心臓を鎮めるため、深呼吸を繰り返す。俺はすぐに息を整えると、ハイランドに向かって言った。

「魔導書…それも召喚が出来る魔導書は、普通の物よりかなり希少だ。…どうやって手に入れた？」

「ふふ、案外、価値の分からん奴ではないらしいな。そう、これは召喚の書と呼ばれる物だ。しかし俺が何故これを持っているか…そんなことを気にしている余裕はないんじゃないか？」

「さぁ、そこのガキを殺せ！」

ハイランドの命令に従って、2体の人形が俺に向かって殺到する。俺は人形をギリギリまで引きつけて、足元を潜る様に駆け抜けた。こいつらはそんなに足は速くない。一度抜いたら追撃を食らうことはない！

俺はスリ時代のテクニックがまさかこんな所で役に立つとは、と思いつつハイランドを目指す。

しかし、俺はとっさに背中から聞こえる音に反応して身を伏せた。俺の頭上ギリギリを剣が回転しながら通り過ぎる。

「剣を投げるとか、無茶苦茶なことをしやがって…！」

「さっきのナイフのお返しだ。悪く思うなよ、ガキ」

俺が立ち止まっている間に人形が肉薄する。

「死ね！！」

人形の腕が俺に向かって振り下ろされた。

俺はそれを横に転がって躱し、鉈を足元に突き刺して床に縫い付ける。そして、迫ってくるもう一体に構わず、俺は親父から受け取ったあるものを取り出し、ハイランドに向けて引き金を引く。

パン！

炸裂音。廊下に立っていたのは…。

ゴーシュだった。

「ま、魔導銃…！？」

ハイランドは胸を押さえて蹲る。

「いや、こいつはただの普通の銃さ」

俺はガンマンのようにくるくると銃を回す。

「親父の方針でね。実力に見合った装備を…ってことで、これを渡されたんだ。たった一発しか打てない銃を、な。便利なものをただ便利と割り切るのではなく、利点をちゃんと把握しろ、だとさ。俺としてはこれの使いどころを見極めなくちゃいけないから、大変だったよ」

俺は動きの止まった人形から離れ、床に落ちている剣を拾う。

「ま、結果オーライってことで」

「待て、待て待て待て！俺様は次期国王になる男だぞ！？手を挙げて良い存在じゃないん」

「妄想もいい加減にしろよ」

ドスッ。

「がっ！？」

ドスッドスッドスっドスッドスッドスッ。

「や、止め」

ドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッドスッ。

「や」

ドスッドス。

「…」

ドスッドス。

ん？やっと死んだ？

残るのは、細切れの肉片と血だまりのみ…。

俺、護衛する。４（後書き）

ゴーシュがこんなに拘るのは、傭兵強化（凶化？）修行のせい？

自分で書いてて、少なからず引いた。

一部訂正しました。

俺、惑う。

次の日。

国民に国王からハイランド王子暗殺の報が知らされた。

あくまで、暗殺である。国民たちはこの醜聞とも言えるスキャンダルに大いに想像力をかき立てられ、その存在を疎んだ国王が犯人ではないか、という噂すら流れた。

結局、この話題も次第に関心が薄れ、忘れられてゆくこととなる。

「案外、国民って鋭いよな。まぁ、実際はあっちから死にに来たようなモンだけど」

俺はテントを張りながら独り言を漏らした。

明日からサーカスが始まるので、全員が何かしら仕事をしている。元々はサーカス団としてこの国に入ったので、こういうこともしなければいけないのだ。

まぁ、こういう所を資金源にしてるんだろうな、と杭をハンマーで打ちながら思った。どうやら、サーカス団としてもそこそこ有名であるらしく、さっきからちらほら差し入れやら見学やらで人の出入りが多い。

「この時代、娯楽はほとんどないんだろうしなぁ。えーと、市民を満足させるのはパンと…何だったかな？」

やはり、前世の記憶は前より薄れているみたいだ。この感じからすると、重要な記憶を優先的に覚えているのかな？どっちにしろ、あと１０年で完全に消えてしまう記憶だが。

「すいません」

俺は後ろから声をかけられた。後ろを振り向く。するとそこには、同い年くらいの少年がいた。サーカスが珍しいのか、目をキラキラさせて俺を見ている。

「何か？」

「ああ！すいません。実は、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

ああ、やっぱりか。しかし、サーカスってそんなに珍しいのかね？俺はそう思いつつ少年に耳を傾ける。

「コンヴェールの村って、知ってます？」

俺はその名前を聞いて、顔から血が一気に引いていくのが分かった。

「な、んで、その村の名前を…」

何が可笑しいのか、少年はクスクスと笑う。無邪気に。無垢に。

「さぁ、何ででしょう？」

その、人を使って遊ぶような、気持ちが悪い笑い方に、俺は直感的に目の前の存在が何だか分かった。

「何しに来た。俺の前に出てきて、今度は何をたくらんでる？」

「ひどいなあ。僕が君に何かしたかい？もっとも、今回は確かに、たくらみごとはあるけどね」

「失せろ。二度と俺の前に現れるな」

俺は話も聞かずに切り上げる。コイツに関わるとろくなことにならない。ただでさえ、トラウマの原因を作った奴なのに。

「いいのかなぁ？君にあんなひどいことをした奴らを教えようと思ったのに。ざーんねん」

俺は、その言葉に足を止めるほかなかった。

「ん、ん？知りたい？知りたいよねー。心の底では、復讐してやりたいって思ってるんでしょう？」

それは。

「僕もね、君に与えた才があんな風に機能するとは思わなかったん

だ」

とても甘く。

「ごめんね？」

とても甘美で。

「だからさ、せめてものお詫びとして、一生かかっても知りえないような情報」

人を狂わせる。

「つまり、あの村を焼き払い、皆殺しにした犯人を教えてあげようと思ったわけさ」

悪魔の囁き。

「さぁ、どうする？」

「おーい、ゴーシュ。飯だぞ」

ガンテは辺りを見渡す。

「ゴーシュ？」

返事は、無かった。

俺、惑う。（後書き）

ＰＶ８０００、ユニーク１０００突破！

どちらも初めてで興奮してます！もっと見てもらえるよう、頑張るぞ～！！

その革命の名は。

ゴーシュが行方不明になってから、1週間が経った。

傭兵団のメンバーは、あれからゴーシュをあちらこちら探して回ったが、一向に見つかる気配はなかった。

ガンテは、独りため息を付いていた。なかなか見つからない焦りから、濃い疲労が見て取れた。

「お頭、大変だ！」

「どうした…」

返事をするのも億劫そうに顔を向ける。

「ゴーシュが、見つかったらしい」

「なにぃ！？」

すぐに立ち上がり、部下の襟首を締め上げる。

「どこだ？どこにいた！？」

「お、落ち着いてくだせぇ、お頭。それじゃ息ができねぇよ」

「す、すまん」

ゲホッゴホッとせき込みながら部下が答えた。

「そ、それが…。落ち着いて、聞いてくださいよ？」

「ああ」

「ゴーシュらしき子供を、行商人が見た、と言ってました。問題は場所。フランスです」

「フランス？」

「ええ。それと、気になる…というか、信じられない情報がもう一つ」

「それは？さっさと言え」

「それが…ゴーシュが、村一つを潰した、と」

「は？」

「ここ最近、フランスは情緒不安定になっているそうで…。各地で暴動が起こっても不思議はない、とその行商人が」

「そんなこと、あり得るわけねぇだろうが！！」

ガンテはテーブルに拳を叩き付ける。その衝撃でテーブルは粉々に砕けた。

「あいつは！あいつの村は！焼き尽くされた！あいつが同じことをするはずがないだろうが！？」

「しかし、その行商人が言うには、白髪の、しかも子供だって…。俺たちだって信じたくねぇのは一緒です。でも、そうとしか…」

ガンテは力が抜けたように椅子に座りこんだ。

「一体、ゴーシュに何があった…？」

――ところ変わり、フランスの首都、パリ。

「しかし、何者なんですか、父上。我々傭兵を雇った者は」

「ふふ、同業者ですよ」

二人の男が、安っぽい宿の前で話していた。

「お前にはぜひ会わせてみたい見たい方でね。きっと、いい勉強になると思いますよ？なにせ、これから１００年は先になるだろう革命を、たった一人で火種を業火にまで変えた人物なのだから」

「父上がそこまで言うなんて…珍しいですね」

「ええ、年甲斐もなく興奮してしまっていますからね。きっと、この革命は成功するでしょうし」

すらりとした服を着た男が、ある部屋をノックする。

「失礼します」

「…入れ」

「それでは、最終確認をしましょうか？」

「ゴーシュさん」

その革命は、たった1日で王城を制圧。史上初めての無血革命となった。後に、王の血縁者は全て断頭台に処され、フランスは民主国家として生まれ変わることとなる。

後の世まで、長く語り継がれることとなるその革命の名は――――

――――『フランス革命』と呼ぶ。

その革命の名は。（後書き）

感想、お待ちしてます。

番外編1　とある傭兵団の休日。（前書き）

番外編、はっじま～るよ～！

今回はニーナ視点だぜ！

番外編1　とある傭兵団の休日。

ニーナは、パパに呼ばれてへやにはいった。

はじめてニーナのお兄ちゃんにあえるんだって。どんな人なのかなぁ？

この人がニーナのお兄ちゃんなのかな？パパは、お兄ちゃんとニーナのおかあさんはちがう人だっていってたけど、お兄ちゃんはとてもパパににているような気がするな。

だって、まゆげにしわがよってるのがそっくりなんだもん。ちがうのはまっしろなかみの毛かなぁ？

ニーナは、ぽけーってニーナのお兄ちゃんをみてた。ほんとにまっしろなかみの毛だなぁ。

パパがお兄ちゃんになにかをいって、お兄ちゃんはほんのすこしだけニーナのほうをみた。

ずっとみてたけど、お兄ちゃんはぜんぜんかおがかわらないのはなんでだろう？

あ、お兄ちゃんがこっちみた。

「…よろしく、ゴーシュだ」

なんだかぶすっとしてニーナをみてる…。

なんだかむねがもやもやってなったから、ニーナも、ぶすっとへんじをすることにする。

「…よろしく」

そういったあとで、ニーナはなんだかはずかしくなったから、パパの足のうしろにかくれた。

なんだか、パパがうれしそうだった。

お兄ちゃんとあってから、お月さまと6かい？えーと、7かいお

やすみなさいした。

お兄ちゃんはなんだかいそがしそうで、ニーナはものかげからじっとお兄ちゃんをみていることがおおくなった。

お兄ちゃんはいつもいそがしそうで、ニーナにぜんぜんかまってくれない。つまんないな…。

ニーナは、つまらなくなっちゃったから、おそとにあそびにいった。

「きょうはなにしてあそぼうかな」

よし、きょうはたんけんしてみよう！

おそとはたいようがさんさん、さんざんだっけ？ふりりそそいでいて、ポカポカしてあったかいな。

ちかくにもりがあるから、そこにいってみようかな。

もりの中は、なんだかうすぐらくてこわい。どうしよう、もうかえろっかな…。

ニーナは、うん、ってうなずいてかえることにきめた。だって、こわいもん。

あれ？どっちからきたんだっけ？

「う～ん」

ニーナはどうしようかまよった。たしか、パパが「知らない所で迷子になったら、なるべくそこから動かないようにしなさい」っていわれちゃってるし…。

でも、だいじょうぶ、っておもうからそのまままきたみち（と、おもうほう）にあるいていこう。

そのままあるいていると、ガサゴソって音がした。ニーナは、こわくてうごけなかったけど、ゆうきをふりしぼってちかづいてみる。

すると、そこからこいぬさんがでてきた。まっくろで、ニーナとおなじくらいおおきい。

「もしかして、あなたもニーナとおなじまいごなの？」

こいぬさんにきいてみる。

こいぬさんはニーナのあしをペロペロなめて、ニーナにじゃれついてきた。かわいいなぁ。

「じゃあ、いっしょにいこうか」

「ウォン！」

ニーナはこいぬさんといっしょにもりをあるいた。いまはこいぬさんがいるから、もりになかもこわくないな。

とつぜん、こいぬさんがとまっちゃった…。なにか、いるのかな？

ズシン、ズシン。大きなくまさんが、もりの中からでてきた。こいぬさんは、ニーナをまもろうとまえにでてるけど、くまさんはニーナたちより、とってもおおきかった。

たすけて…！

「俺の妹に、何してんだよ熊風情が…」

え、お兄ちゃん？

つむってた目をあけると、そこにお兄ちゃんがいた。気が付くとくまさんもいない。

「大丈夫か？」

お兄ちゃんのこえがして、お兄ちゃんのかおをみる。ニーナは、お兄ちゃんのかおがパパといっしょだなっておもった。

だって、パパにすごいおこられたときとおなじかおをしてるんだもん。

「ぐすっ。ごめんなさぁい！」

ニーナはないちゃったけど、お兄ちゃんはパパとおなじように、ううん。

もっとやさしくだいてくれた。

「おい、ゴーシュ。俺は言ったよなぁ…。ニーナを泣かしたら、首ちょんぱだってよぉ…！」

「そんなこと一言も――」

「うるせぇ！男に二言はねぇだろう！」

「だめだ…、混乱してる…」

ニーナは、お兄ちゃんをおこっているパパにむかってなった。

「ゴーシュにぃをいじめないで！パパなんてきらい！」

「がーん！に、ニーナ。これはだな…」

ぷい。

ニーナはしらんぷりをする。

「おーい」

ぷい。

「ど、どうしよう！ニーナに嫌われたぁ！！」

この世の終わりだぁ！

そういって、パパはなきながらどこかへいっちゃった。

「あの、親バカめ…」

ゴーシュにぃがなんだかいってたけど、きこえなかった。
「それよりニーナ。その犬、ちゃんと飼えるか？」
「うん！」
「よし、それだったら、名前を付けてやらないとな」
「うーん…」
なんてなまえにしようかな…。
そうだ！
「ベルガー。あなたのなまえはベルガーね！」
「ベルガーか、いい名前だな。よろしくな、ベルガー」
「ウォン！！」
ふふっ、よろしくね、ベルガー。
よろしくね、ゴーシュにぃ。

番外編1　とある傭兵団の休日。（後書き）

ゴーシュの1か月間の修行、とある1日の一コマ。

楽しんで頂けたでしょうか？

ちなみに、ニーナの一人称は『ニーナ』です。

私、旅立つ。（前書き）

まさかまさかの主人公不在。自分は一体どこに行きたいんだろう。

私、旅立つ。

フランス革命。

この革命は世界に多大な影響を与えた。新フランス政府は旧フランスが新型魔法の開発に成功していたことを発表。世は拓かれし時代へと進んでいった――。

ゴーシュが行方不明になって１０年。彼がいなくとも時は進んでゆく。この１０年で魔法の技術が発展し、以前より生活に深く浸透していった。フランスは民主国家へと成長を遂げ、ヨーロッパ周辺の中心地として発展している。

しかし、魔法の技術の革新は生活だけでなく、戦争目的として新兵器の開発、研究が盛んに行われるようになった。

そして、物語は再びローマ王国から新たに始まる――。

私はライフルに付いたスコープを覗いていた。拡大された視野の

は一頭の鹿。私は深呼吸をして息を整える。集中。私は息を止めて引き金を引いた。

「ベルガー、今日は大物だね」

「ウォン」

私は仕留めた鹿をベルガーの背に乗せて山を下りていた。あれから１０年。私は強くなるために特訓した。私は女だから、腕っ節はあまり伸びないと思ったし、パパも同意見だった。

だから、私は銃の扱いにこの１０年を費やした。ただ強くなるために。ベルガーも協力してくれて、今では何とか一人前だ。

「ゴーシュにぃがいなくなってから１０年、かぁ」

１０年。今年で私は１４歳だ。そろそろ、パパにあのことを相談してみようかな。

私はベルガーと一緒にテントに戻った。

「パパぁ。お肉、取って来たよー」

「おう。良く帰ったな、ニーナ」

テントの奥からパパが出てくる。この１０年でパパも年を取った。白髪が出てきて少し老けた感じがする。もっとも、『逆鱗』の名は未だに健在だ。

「あのさー、パパ。相談があるんだけどー」

「何だー？」

パパは鹿の肉を捌いていて背を向けている。

「ゴーシュにぃ、探しに行こうかと思ってるんだけど――」

ドサ。

肉を落とした音がテントに響いた。

「パパ？」

何か震えてるんですけど。

「ぱ、」

「ぱ？」

「パパは許しまヘンでー！！」

「パパが壊れた～！？」

その日は一日中パパが暴れて全然話が出来なかった…。

「で、ずっと暴れて聞く耳を立てないと」

「はい。どうにかなりませんか？ガイおじさん」

私はローマ王宮に来ていた。パパが役に立たない以上、こんなことを相談できるのはガイおじさんだけだ。王様に頼みごとって、どうかと思うけどね…。

「うーん、そうだな…。それだったら、一ついい考えが無いこともない」

「あるんですかっ！」

私はその返事に前かがみになった。どんな内容でも、ゴーシュにいを探せるなら何でもいい。

「うん。実は、私の娘が今フランスに留学に行っていてね。知らないかな？パリ中央騎士学院って」

「確か、フランスにある学校ですよね？」

「その通り。ここに行ってみてはどうだろう？ここなら、各地から最新の、それもあらゆる分野の情報が入ってくる。ここならゴーシュ君を見つけることができる手がかりがあるんじゃないかな…。というか、娘はそれが目的で入学したみたいなんだよ」

はぁ、とローマ国王がため息を付いた。

「積極的になったのは喜ばしいんだが、なんともなぁ」

国王の姿には哀愁が漂っていた。…なんだかかわいそうだな…。

「おほん。とにかく、これは提案だ。資金はこちらが持とう。娘の護衛、という形で依頼を出すからね」

ローマ国王はパチン、とウィンクした。

技術の進歩って凄いよね。今じゃこんな大きい鉄の塊が魔法で動くんだもん。私は荷物を持って列車のホームに立っていた。見送りはパパだけだ。

なんでも、ガイおじさんから別の依頼が入ったらしい。みんなは準備で大忙しだ。

「くそ…、ガイの奴、要らんことに頭が回りよって…」

パパは出発の時までぶつぶつ文句を言っていた。まったく、パパ

には困ったもんだなぁ。

「だいじょぶだよ。ベルガーもいるし。ね、ベルガー」

「ウォン！」

ベルガーは、任せろ！とばかりに返事をしてくれた。うん、頼りにしてるからね。

「それじゃあ、行って来るね」

「気を付けてな」

プシュー。

どうやら列車の準備も整ったらしい。私たちは列車に乗って窓から身を乗り出す。

「行ってきまーす！！」

私はパパが見えなくなるまで手を振り続けた。

――いざ、フランスへ。

私、旅立つ。（後書き）

今回からニーナが主人公になります。さて、ゴーシュは見つかるのだろうか？

あと、ニーナに使って欲しい銃とかあるでしょうか？感想で言って頂けたらできるだけ調べて使うようにします。

銃っていっぱいあって分からないんですよね…。詳しい人はぜひ！

私、からまれる。

パリ。

フランスの首都であり、ここ１０年でヨーロッパの中心地になった場所だ。なだらかな丘陵が周囲を取り巻き、中央をほぼ東から西にセーヌ川が流れている。

ゴーシュの生前――前世では芸術都市として名を馳せたがここでは学術都市として世界中に知られる。ヨーロッパでも初の民主国家でもあり、他国から移住してくる人も少なくない。

ニーナは1日をかけて列車でパリに到着した。

「っは～！ここがパリかぁ！すごいすごいっ！人がい～っぱい！」

私は初めて見る光景に心が躍った。一面人、人、人の群れ。ローマも小国ながら人口はそこそこあるが、一度にこんなに大勢の人を見るのは初めてだった。

「ウォン」

と、はしゃいでいると私はベルガーに荷物を引っ張られた。用事が先、とばかりに私を見る。

「む～。分かったよ、ベルガー。観光は後、ね。まずは合流しないとね」

私はズボンのポケットからガイおじさんに渡されたメモ書きに目を通して、目的地に向かった。

「えーと、確かここらへんに…」

私はメモの住所と列車の中で覚えた地図と照らし合わせる。列車の中は暇だったので地図をずーっと眺めていた。地理の把握は傭兵の基本だからね。

私はメモとにらめっこしながら道を歩く。何だか視線を感じるけど、そんなに物珍しいのかな？と、思っていると、前から気配を感じて顔を起こした。

前方に3人組の男たちがいた。顔立ちはまだ幼い所があるから、学生か何かだろう。ここにはニーナが通うことになる騎士学院以外にも、たくさんの学校がある。今日は休日だから学生がうろついていても何ら不思議ではない。

三人組の学生（？）の内、背の高い一人が二人に何事か言うと、私に近づいてきて話しかけてきた。

「ねぇ君。観光？一人だったら危ないよ」

「なんだったら、俺たちが案内してやるぜ。ここらには詳しいし」

「なぁ、行こうよ」

何だこいつら。妙に馴れ馴れしくて鬱陶しい。こんな奴ら、無視するに限る。私はチラ、と一瞥しただけで歩くのを再開しようとした。

だけど、三人組は巧妙に私の前に立ちふさがって前に進むのを邪魔する。私はイラッとして初めて口を開いた。

「何、なんか用？」

私の剣呑な響きに一瞬怯むも興味が湧いたと勘違いしたのだろう。さらに図々しく近寄ってくる。

「や、君、観光者だろう？だったら俺たちが道案内しようと思って。どうかな？」

背の高い奴がキザったらしく笑う。キラーンと光った白い歯が妙に腹が立った。

「別に。困ってないし」

私がぶっきらぼうに返事をすると金髪の男が声を出す。

「それに、女の子が一人だと危ないだろ？犬一匹に何ができるわけでもなし」

はっはっはと笑う男たちだが何が面白いのか訳が分からない。ベルガ―は基本的に私が指示を出さないと動かない。パリに来るときにむやみやたらに噛みつかないように、と言っておいて正解だった

かもしれない。
今にも噛みつきそうなほどイラついてるのが分かる。後で褒めてあげないと。
「私、急いでるから――」
さっさとどいて、と続けようとしたら男たちの後ろから手が伸びてきて三人組の一人の肩を掴んだ。
「あ？」
肩を掴まれた男が振り返る。そこには、赤い髪をした青年が立っていた。
「あ～、君たち。女の子一人を囲むたぁ男の風上にも置けねぇな。ちょっち、下がったらどうだ？」
軽い感じの雰囲気を醸し出しているが、妙に隙がない。が、私にはそれが分かるが目の前の三人組に分かろうはずがない。男は鬱陶しそうに眉を吊り上げた。
「あぁ？なんだよ、お前」
「人が話してるのに邪魔しないでもらえますー？」
「さっさと失せろ。しっし」
三者三様の反応をしているが、私から見ると隙だらけ。こっちを見てないのをいいことに私は三人に足払いをかける。

「うわっ」

「痛っ」

「ぐうっ」

三人は見事にひっくり返って無様に転がった。私はフン、と鼻息ひとつして歩き始める。

「待ちやがれ！」

後ろから声がして私は振り返った。そこには背の高い男が顔を真っ赤にして私を睨みつけている。

「下手に出てればいい気になりやがって…。俺は侯爵家の息子だぞ！」

知りません、そんなこと。私はそのまま言ってやった。

「知らないし、そんなこと。第一、ここは民主国家フランスよ？身分なんて関係ないじゃない」

「う、うるさい！このメスガキがぁ！！」

私の挑発に乗って、男は拳を振るってきた。私は女だが、鍛えてもいない一般人に負けるほど弱くない。私は男の腕を避けてカウンターを腹にぶち込む。

「グフッ！？」

「ひゅー」

赤毛の青年は口笛を吹いて感心したように私を見た。ていうか、止めなさいよ。男でしょ。

「キ、キサマ、こんなことして、ただで済むと、思ってるのか？」

息も絶え絶えに這いつくばる男。道を歩く人々は遠回りに私たちを眺めていた。

「ふん、先に手を出したアンタが悪いでしょ。ね？お兄ーさん」

「そうだなぁ。確かに、俺には旦那から手を出したように見えたぜ？確か、暴行罪、ってやつに引っかかるんじゃないか？いやー、捕まったらお父上になんて言われるか見物だなぁ」

ニコニコと言い放つ。この人、男が手を出すのを止めなかったり嫌味を言ったり、いい性格してるわね。

「くっ」

悔しそうに唸ると男は私たちを一睨みして「お、覚えてろっ！」と、捨て台詞を言い放って去っていった。

「さぁ、見物は終わり！帰った帰った！」

青年は見物人にそう言ってしっしっと手を払う。見物人たちは興味を失ったのかどんどん輪が崩れていって元通りの風景に戻った。

さて。

「さっきはありがと。じゃあね」

「うおぃ！それだけ！？」

私はツッコミを無視して再び歩き始めた。

私、からまれる。（後書き）

こんなの一度書きたかった。

私、入学する。

「まぁまぁ待てよお嬢ちゃん。ほら、俺って君を助けてあげた騎士（ナイト）じゃん？」

「騎士はナンパなんてしないと思うんですケド？」

私は未だに後ろに着いて来る赤毛の人を見ずに応える。まったく、フランスにはこんなのしかいないのかな？私は待ち合わせをしていた店にたどり着いた。『ガーネット』と書かれた看板を確認して、中に入る。

どうやらここは喫茶店のようで、昼間ということでなかなかに人が入っていた。結構繁盛しているのかもしれないな、と思っていると、私に気が付いた店員が近づいてくる。

「お二人様でしょうか？」

「あー、そ」

「違います」

きっぱりと応える。私は待ち合わせがいると伝えると、「こちらです」と店員さんは私の先を歩いて行った。私は赤毛さん（いちいち赤毛赤毛言うのメンドクサイ）をほって店員さんに着いて行った。

「チックショー！」

他人のフリ他人のフリ（実際他人だけど）。

どうやら二階にプライベートゾーンがあるらしく、私は店員さんに促されて二階へと上がっていった。階段を上ってすぐの扉を開ける。そこには部屋いっぱいを使った贅沢な作りになっていた。部屋には居心地の良い空気が流れていて、かなりお金を使ってそう。

部屋の中心に机とイスが置いてあって、待ち合わせをしていた人物が優雅に紅茶を飲んでいた。

「セレ姉！」

私の声に気付いて、セレ姉は顔を上げた。肩口まで伸ばしたローマ王家特有の濃い青が差している髪が、顔の動きと共にふさっと流れた。

「ニーナさん！」

私はダッっと荷物を放り出してセレ姉に抱き着いた。ちょっぴり緩んだ涙腺から涙が漏れる。そんな私を見てセレ姉はフフ、と笑った。

「ニーナさん、大きくなりましたね。2年ぶりだから、それも当然だと思うけど」

セレ姉はいつもと変わらない口調で私の頭を撫でてくれる。私は小さい時もこうやって寝かしつけてもらったな、と思いながらしばしの間その手の感触を味わった。

「でも、また会ってニーナさんがちょっぴり泣いてるのを見て、見送りの時を思い出しちゃいました」

「や、止めてよ。あの頃はまだ小さかったんだし！」

私たちはお互いにイスに座ってお茶を飲んでいた。セレ姉の紅茶はいつ飲んでも美味しい。私は顔が赤くなるのを紅茶を飲んで誤魔化す。

2年前、私はセレ姉の留学の見送りに行ったのだけれど、お別れが寂しくて大泣きしてしまったのだ。私の中では未だに恥ずかしい過去として記憶に残っている。

「ふふ、そうね。その小さかったニーナさんがこんなに可愛くなったんですもの。2年って本当に早いわ」

ぶふーっ！！

「ゲホッゴホッ…！セ、セレ姉いきなり何言い出すの！？」
「え？だって、そうでしょう？フランスに来てすぐに男の人たちに声をかけられてたじゃない」
ど、どうしてそれを！？
私は口をパクパクさせていると、コンコン、とドアをノックする音が。
「失礼～♪」
そこから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「あ、赤毛！？」
「おいおい、どんな覚え方だよ」
「先輩、さっきはニーナさんを庇って貰ってありがとうございます」
「せ、先輩！？」
私は赤毛を指差して大声を出してしまった。それくらいビックリしたと思ってほしい。
「おうよ！そういえば自己紹介してなかったなぁ――俺はサックス・ミュラー、騎士学院の三回生だ。よろしくな～」
ひらひらと手を振る赤毛――ミュラー。私はしばらくの間開いた

口がふさがらなかった。

私、入学する。（後書き）

「新キャラミュラーの、教えて！豆知識のコーナー！」

ワーパチパチパチ！！

「さて、ここでは作者の書きたい！でも書く余裕がない！ってことで急遽作られたコーナーだぜぃ。さて、早速一つ！」

「今ではすっかり世に普及している銃！これは火薬を使うタイプと、魔力を変換して銃弾を作るタイプの2種類があるんだなぁ」

「ここで面白いのが造られたのは魔力を変換して銃弾を作るタイプ――魔導銃が先なんだなぁ。これは結構昔から作られていて、魔術先進国イギリスが造ったんだな」

「火薬式の銃はそれより後に生まれたんだな。魔力が少ない人とか、傭兵にも好まれて使われるな」

「火薬式は威力が高い。ただし、弾に金がかかる。魔導銃は弾は自前だからな。まぁ、威力は小さいけど。連射性が高いのが特徴だな、魔力が強い奴はこの限りじゃないけどな！」

「今回は以上だ！他に教えて欲しいことがあったら感想に書いてくれな！答えられる質問は出来るだけ答えるぜ！」

「そんじゃ、まったな～！」

私、入学する。2

「さて、お嬢ちゃん。そろそろこっち側に戻ってこいよ〜」

私は驚きで混乱した頭を必死に回転させて目の前の光景を何とか処理しようと試みた。…やっぱ無理。

「ほ、本当に学院の生徒なの…？」

「ん？なんなら生徒手帳見る？」

私は萎えた頭を振って、ため息をついた。

「はぁ、なんでこんなのが…」

私の独り言に赤毛は二カッっと笑った。

「おう、感心してんのか？」

「呆れてるの…」

私は一気にやる気を削がれるのを感じた。もういい…帰ってベットで寝ていたい…。

「ふふ、先輩。そろそろニーナさんをからかうのは止めて、話を進めましょう」

「かーっ、セレナは真面目だねぇ。息抜きだよ、息抜き。人生、ず

っと肩張ってたって疲れるだけだろ？」

ミュラーはそう言って肩を竦める。私から見たら、アンタは緩すぎだ。

「もう、先輩はお気楽すぎるんです。さぁ、ニーナさんも。」

私は何とか持ち直して、居住まいを正す。私とミュラーが座り、話をする体勢を整えたのを確認して、セレ姉は口を開いた。

「さて。まずはニーナさん、あなたには中央騎士学院に入学して貰うことになります」

「にゅ、入学？確か、私はセレ姉の護衛ってことになってるけど――」

私はそこまで言って、ミュラーがここに居ることを思い出して、はっとした。動揺したからといって、こんな簡単に依頼内容をべらべら喋っていいわけではない。

「ああ、心配はありません。先輩は協力して頂いてるんです」

「協力？」

「うむ。実は、俺もゴーシュの旦那と面識があるんだ」

私はその言葉を聞いて椅子から跳ね上がった。

「本当に！？」

「応。俺がまだ学院に入学していなかった時――俺の住んでいた町にふと立ち寄った旅人がいてな。それが旦那だった。何か、訳ありだったみたいでな。ちょっとしたトラブルを解決してくれたんだ。ま、命の恩人って所かな」

「そんなことが――」

「ゴホン。それでは話を戻しますね。入学して貰う理由ですが――これには2つあります」

「1つが、学院内の情報を集めるのに数が多いに越したことはない、ということ。もう1つが、私では探れないような情報も、ニーナさんなら手に入る可能性が高い、ということです」

それっていったい？私に疑問があるのが分かったんだろう。横からミュラーが補足を入れる。

「まずは学院の事について説明しないとな。学院は4回生になると卒業するんだが――元々は士官学校だった所でな。学年以外に階級が存在するんだ」

ミュラーは指を立てて説明する。

「兵士（ポーン）・塔（ルーク）・僧侶（ビショップ）・騎士（ナイト）。この4階級に分かれているんだ。それぞれ自分の成績によって順番にランクアップしていくシステムでな。卒業時に最終的な階級で成績が決まるわけだ」

「しかし、その中でも特別な階級がある。それが王（キング）と女王（クィーン）だ」

ミュラーに続けてセレ姉も口を開く。

「その階級の名前が示すように、男女一人ずつしかなれないんですが――階級に関しては学年は関係ありません」

「完全実力主義って訳さ。俺は騎士クラスでセレナは塔クラス。階級によって閲覧できる内容も変わってくるからな。王クラスと女王クラスだと、最高機密クラスの情報を引き出せるハズだ」

「そ、それを私に目指せって言うの、セレ姉？」

「はい。お願いします」

セレ姉はそのまま私に頭を下げた。

「ちょ、ちょっと！セレ姉顔を上げてよ！分かったから、王でも女王にでもなればいいんでしょ！？」

「ま、そういうこったな」

セレ姉は顔を上げてニッコリ笑った。

「ニーナさん、よろしくお願いしますね」

…セレ姉、少し見ない間に狡猾になったなぁ。私は二人に見えないようにこっそり嘆息した。

私、入学する。２（後書き）

「ミュラーの、教えて！豆知識のコーナー！」

「さぁて、今回は前回に続いて銃の歴史についてだ」

「さっそく質問、ありがとうございます！」

「まず弾についてなんだが――魔導銃の弾は魔力が半物質化した物なんだ。衝撃が浸透するイメージかな。急所に当たっても致命傷にはなり難いから、警察が使うことも多いぜぇ」

「中には属性付与が出来る凄腕もいるが…ま、所詮は少数だな。そんなことするより単純に威力を上げた方が便利だし。威力を調節できるってのはいいよなー」

「で！もう一つの質問が命中精度の問題だ。魔導銃は弾が半物質ってことで風などの影響が受けにくい。が、火薬式だとそうはいかない。当初作られた火薬銃は５ｍ未満で使うことを前提にしてたんだなぁ」

「作中でも、ゴーシュが一発しか撃てない銃を渡されたのも、連射が出来る銃が少なかったからだ」

「まぁ、魔法の技術の進歩と相まって兵器の研究が盛んに行われたから、今ではライフルリングの技術はあるんだけどな」

「魔導銃のメーカーはイギリスのセイドン社、火薬銃のメーカー

はドイツのハフブルグ社が有名だなぁ」

「他にも、最近では両方の弾種が使える銃も開発中らしい。登場が楽しみだぜぇ！」

「今回はここまで！他にも質問があったらどんどん送ってくれな！」

私、入学する。3

パリ中央騎士学院――通称『学院』。ここには世界中からあらゆる分野の情報、物資、技術などが集中する。それはここに集まる生徒たちも同様に、世界中から子供たちがやって来る。

フランス内にあるが、一種の治外法権を認められており国家の縮図と言っても過言ではない。季節は春――『学院』も、新たなる風が吹こうとしていた。

「へ～、ここが学院かぁ」

私は周囲を見渡しながら感嘆の声を漏らした。ここにはあらゆる国の人間が集まることもあって、様々な文化を吸収した建物が多く見られた。フランス、イギリスなどのヨーロッパ風の建物があれば、地中海の方の建物や、アジア圏の東方風の建物もあった。

「ここにはいろんな国から人がやって来るからなぁ。それだけ、違いが色濃く表れるのは当然だわな」

「ふふ、ニーナさん、目を輝かせてますね。でも、集会堂に行ったらもっと驚くと思いますよ」

「集会堂？」

「入学式とか、そういう行事に使われる建物さ。ほら、あれだ」

スッとミュラーが私の先を指差した。そこには周りの建物とは一回りは大きい建物があった。

「あ、あんなに大きいの！？」

「ま、中はもっとスゲェぞ。俺たちは入学式には出席出来ないからな、精々頑張れよ？」

「何に対して頑張るって言うのよ？」

「行けば分かる」「行けば分かります」

二人は同時に言って、私から離れていった。いったい何があるんだろう？

「え～、諸君。入学、おめでとう。ここでは君たちの希望と夢が……」

私は理事長のありがたい（別にありがたくなんかない）言葉を聞いていた。眠気を堪えているけど、無茶苦茶眠い。あくびを噛み殺しながら周りをこっそり見渡すと、みんな真剣な面持ちで話を聞いている人がほとんどだった。

『以上で、入学式を終了します。』

私は何とか眠ることなく入学式をクリアして、その場で背伸びをする。あ～、気持ちいいなぁ。

『なお、新入生はこの場で制服の採寸がありますので、そのまま待機していて下さい。』

私はその言葉でピタリ、と動きを止めた。…さ、採寸？私はチラッと自分の胸元を見て、周りの女の子と比べる。…頑張れって、そういうことか…。私は、がっくりと肩を落とした。

「おう、お疲れ～」

「お疲れ様です、ニーナさん」

夕暮れ、採寸からやっと解放された私はふらふらと集会堂から出

てきた所を回収された。や、疲れたよ。本当に…。

「まぁ、大丈夫。そういうのが好きな奴だっているさ」

「何よ、もう成長しないって言うわけ！？」

「3年間、俺があらゆる女子を観察してきたデータからすると…。それ以上の成長は望みは薄い」

ドスンッ！！

私は涙目になりながら思いっきりミュラーの腹を殴った。「ぐっは！！？」と声を漏らしてあまりの威力に一瞬ミュラーの体が宙に浮く。地面に這いつくばりながら痙攣するミュラー（アホ）を無視して、私はセレ姉に抱き着いた。

「セレ姉～！ミュラーがぁ！！」

「あはは…」

私、入学する。3（後書き）

ミュラーの、尊い犠牲は忘れない。

Another Side_1 白騎士（前書き）

今回は同じ時系列中にあった話です。

ニーナがフランスに着いた辺りの時――

Another Side_1 白騎士

ニーナがフランスに着いた頃――

――――フランス東部・ドイツとの国境線にて――――

ここ最近、ドイツはフランスに対して露骨な圧力をかけていた。ドイツは未だ貴族制を残し、昔からヨーロッパの覇権を握ろうとしてきた強国であり、軍事演習と言い実弾をフランス領に？誤射？するのは日常茶飯事。最近では戦車を乗り回してフランスにプレッシャーを与えている。

ドイツの戦車隊と言えば、ヨーロッパでは陸上最強部隊とまで言われ、隣国を併呑し続けている。このことにフランス政府は再三止めるようにドイツに呼びかけたが、それを止めることは無かった。

そしてついに――フランスは対抗策を打つことになったのである。

ゴクリ。

その場で、唾を飲み込む音が聞こえるほどに静かだった。ここはドイツとの国境線の最も近い位置。フランスの前線基地のとある部屋での一幕。

ガラス張り――もちろん、対衝撃魔術をかけてある――部屋にて、

基地司令と副司令は目の前の人物に酷く緊張していた。

全身を白の甲冑で包み、肩からは真紅のマント。顔も完全に甲冑で覆われた姿は、まるでおとぎ話に出てくるような中世の騎士のよう。

彼は、《白騎士》と呼ばれる騎士だ。

「そ、それで、大統領は何と？」

脂ぎった汗を次から次へと滴らせる基地司令は、人生でも初めてと言っていい程目の前の人物に委縮していた。

「ええ、『降りかかる火の粉は切り捨てろ。』――それが、大統領の言葉です」

「では――？」

「私が出ます」

2、3言葉を交わしたあと、彼は騎士の礼を取って部屋から出て行った。

「基地司令――あれが、かの？」

「ああ、ハンス君。あれがフランス最強の騎士にして、大統領の懐刀――《白騎士》殿だよ」

「本当にお一人で行くのですか？」

前線基地のとある廊下を歩きながら、白騎士の従騎士、アレン・サスナーは己の仕える主に問いかけた。

「ああ、私の実力は君も知るところだろう。何、ちょっと運動してくるだけさ」

気楽に応える彼――白騎士は、自分の事を心配してくれる弟子に頬を緩ませる（無論、甲冑のため彼の顔は誰も見ることはできないが）。

彼は、廊下の先から漏れる光を潜り――？最前線？へと足を踏み入れた。

「「お疲れ様です！」」

両脇の兵士の敬礼に応えながら、前へ出る。彼の足取りは、まるでちょっと散歩に出るか、というぐらい軽いものだった。

「ちょ、ちょっと！危ないですよ！？」

「まぁまぁ落ち着け、新入り。お前はラッキーだぜ？」

まだ年若い少年兵士に老練の男は少年を止めながら肩を叩く。

「？」

分からないように首をかしげる若者に、百戦錬磨の兵士は言った。

なにせ、フランス最強の騎士の戦闘を特等席で見れるのだから、と。

彼は、鼻歌を歌いながら歩いてゆく。ある程度基地から離れ、フランスの領土内で歩みを止める。

そして、朗々と口ずさむ。

「Ｍｙ　ｄｅｓｉｒｅ　ｉｓ　ｆｏｒｃｅ．（我は力を望む）」

風が吹く。

「Ｍｙ　ｄｅｓｉｒｅ　ｉｓ　ｎｏｔ　ｈｏｐｅ．（我が望みに希望は無く）」

彼を中心にして、力が渦巻く。

「Ｂｕｔ，ｉｔ　ｉｓ　ａｎ　ｕｎｆｕｌｌｆｉｌｌｅｄ　ｄｅｓ

ｉｒｅ．（だが、それは満たされぬ欲求で）」

正確には腕。見えない何かが形作られる。

「Ｔｈｅ ｔｈｉｒｓｔ ｃａｎ ｎｏｔ ｆｕｌｌｆｉｌｌ．（その渇きは癒やすことは出来ない）」

彼は腕を振り上げた。

「Ｔｈａｔ ｉｓ ｅｖｅｎ ｍｏｒｅ ｒｅａｓｏｎ ｆｏｒ ｄｅｓｉｒｉｎｇ ｍｏｒｅ ｏｆ ｆｏｒｃｅ．（だからこそ、もっと力が欲しい）」

そのまま、振り下ろす。

「Ｈａｎｄ ｏｆ ｄｅａｔｈ ｓｔｉｌｌ ｈｏｌｄ ｍｅ．（死の腕（かいな）に抱かれるまで）」

そして――莫大な光が周囲を塗りつぶした。

ドッコォォォォォォォン！！！！

閃光と、爆音の後には――深い、谷が出来ていた――。

「…やり過ぎた」

彼の独り言が、虚しく響いた。

「まったく！貴方はいつもやり過ぎるんですよ！」

「ごめんごめん。でも、やっちゃったもんはしょうがないでしょ？」

「反省の色が見えません！」

彼らが去っていく中、兵士たちは呆然とその結果を眺めていた。

「な？すげぇだろ？」

「…これは、人間技じゃないですよ。先輩…」

少年兵の言葉が、周囲の兵士全員の言葉を代弁している。少年は、去って行く白い騎士に恐怖を覚えたのだった。

「まったく、聞いてるんですか！？――ゴーシュさん！！」

私、入学する。4

さて、みなさん覚えているだろうか。実は、ある存在が途中からすっかり出ていない。

そう、ベルガーだ。

別に、『忘れていた』という訳ではなく、彼にはある役割があるのだ。

夜。

いかに文明が進もうとも、人間が暗闇に恐怖を抱かない、ということはない。街灯の灯りが遠のき、月明かりしか辺りを照らす物はない森の中――一匹の影が走っていた。

そんな中、一人の男が足音に気が付き、そちらを向く。

「おう、ベルガー。ご苦労さん」

中年の男は、背負っていた布に包まれた長い物体を肩から下した。見る者が見たら一目で分かるその長い物体――銃を、近寄ってきた犬の背中に落ちないようにロープで固定する。

彼はニーナやベルガーが傭兵団と関係があることを知っているが、彼も傭兵であるわけではない。

彼は俗に言う『運び屋』だ。

ガンテの豪槍など、特殊な例を除いて、銃など危険な物をフランスに持ち込むことは禁止されている。そのため、彼のように武器を運ぶ人間などが必要になってくるのだ。

彼はロープで固定し終えると、ベルガーを一撫でしてそっと来た方へ手で押す。

ベルガーは『運び屋』の男の手に礼を言うように鼻をスン、といわせると森の暗闇の中を駆けていった。

朝。

私はカーテンから透けて差し込む朝日と鳥たちの鳴き声で目が覚めた。

ゆっくりと脳が覚醒する感覚に任せながら目を開ける。そこは、私の見たことのない天井だった。

ここは女子寮――家が他国にある者は例外なく寮に入る。手配はセレナがすでにやっていた――。私は起き上ってカーテンを勢いよく開ける。

フランスの朝は、ローマとはどこか違う気がした――。

「おはよう、セレ姉」

「おはようございます、ニーナさん」

私は服を着替えて一階の食堂に来ていた。そこでばったりセレ姉とあう。まだ起きていない人も多いのに、セレ姉は制服をビシッと着ていて、1分の隙もない。

かくいう私は、まだ制服が届いていないので私服を着ている。

セレ姉は驚いた風に私を見たけど、すぐに立ち直って笑顔で話しかける。

「ニーナさん、朝ご飯は食べました？」

「ううん、まだ」

「それでは一緒に食べましょうか」

私は嬉しくなってニコニコしながらセレ姉に着いてゆく。他人が見たらニーナを母親に着いてゆく雛を連想したことだろう。

学院の寮のご飯はバイキング形式だ。異国情緒あふれたメニューが所狭しと並んでいる。

私はセレ姉から取り方を教えてもらいながらご飯を皿に乗せる。私はセレ姉の反対側に座って一緒に食べた。

「今日の午後に入学式の時に採寸した制服が届くはずです。それまでは自由ですからね。それまでどうします？」

「うーん、これといって…。ゴーシュにぃを探すにしても、闇雲に探すわけにはいかないし…」

「そうですね。それだったら、今日は武道場に行ってもいいかもしれませんね」

「武道場？」

私は聞きなれない単語に首をかしげた。

「はい。学校、と言っても元々は士官学校でしたから――模擬戦や、訓練をする場所があるんです。授業でも手合せの授業があるぐらいですから」

「へー、そうなんだ！でも私、武器とか持ってないよ？置いてきた

し――ベルガーが今取りに行ってくれてるけど。確か、ここでは火薬式はだめなんだっけ？」

「ええ。魔導式と違って危険ですから。一応、扱う授業もありますけど三回生からですね」

「ぶーぶー、もったいない。あれほどきれいな物はないのに。洗練されたフォルム、効率を重視した銃身。それに、撃った時の感覚。全てが良いじゃない」

言っていることは物騒極まりないが、別にニーナは人殺しが好きなわけではない。銃を愛しているだけである。――傍から見ると、ただの危険人物だが。

セレナはそのことを知っているから苦笑する程度だ。だが、ふと笑いを引っ込めると真剣な目をニーナに向けた。

「時にニーナさん、武道場が開くまで時間があります。その間に――」

「その間に？」

「その、ボサボサナ髪を切っちゃいましょう」

「……。え？」

ニーナが後に語ることによると、この時のセレナの眼差しは一流の傭兵の眼光より鋭かったそうだ。

私、入学する。４（後書き）

次回に続く！

感想その他、お待ちしています！

私、入学する。5

恐怖というものにも種類がある。

恐れ。

怖れ。

惧れ。

畏れ。

懼れ。

そう、恐怖とは多面性を持つ物なのだ。

では、私。ニーナ自身にとって、今感じているおそれは何なのだろうか？

――――少なくとも、戦場で感じる恐怖とは完全な別物であることは間違いないだろう。何故なら――

「さてニーナさん。髪を切りましょう」

がっしりと肩を掴んだ手は、振り払おうとも振り払えない圧力を秘めていた。私は、背中どころか体中から流れる冷や汗が、自身の危機を伝えるものだと確信していた。だって、セレ姉の顔は笑っていても目は笑ってないんだもの…。

あれあれ？私は何かセレ姉の逆鱗に触れるような行動、または発言をしたっけな？

「あ、あの、セレ姉？何か、不満でも…？」

「不満？いいえ、ある訳ないじゃないですか。強いて言うなら、その伸ばしたままボサボサの髪は、一淑女としてどうかと思うかといったことぐらいですが」

めめめメチャクチャ不機嫌ー！？え・え・え？何で？何で髪の事でこんなに怒られてるの？

「いいですか？髪は乙女の命です。時と場合によっては自分の命より優先させなければなりません」

「いや、髪より命の方が大切――…」

ギロリ。

「どうぞ、続けてクダサイ」

コワイー！！セレ姉がコワイよー！！

「そもそも、私はニーナさんが傭兵の仕事をするなんて反対だったんです。それを揃いも揃っていい大人が斥候の仕方から銃の扱い方を教えたり、物騒な依頼を押し付けたり…」

途中から論旨が変わってきた。何だかセレ姉の髪が怒りでうねっているような幻覚が見える。その時、ローマにいるいい大人たちが同時に悪寒が奔るのは、ニーナたちは知らないことである。

「はっはっは。それでお前はさっきからぶすっとしている訳だ」

「冗談じゃないよ、ミュラー。本当に怖かったんだから」

私は膝を叩いて笑っているミュラーを睨んだ。本来、先輩なり、敬語なりを言わなくちゃいけないんだろうけど、いまいちこのミュラーという男には尊敬の念を抱けない。口調はぞんざいになっていて、本人もとやかく言わないからそのままだ。

私は椅子に座ったまま準備をしているセレ姉をひたすら待った。髪が落ちたら面倒くさい、ということで寮の外で散髪することになったのだ。所謂、青空美容室と言ったところか。

私としては髪の事なんてどうでもいいのでセレ姉がこのまま来なければいい、と思うと同時に一刻も早く来て散髪を終わらせてくれと、相反する思いが渦巻いていた。人の目がある中で散髪て、何の羞恥プレイか。

「まぁ確かに、お前のその髪型目立つからなぁ。ぼさぼさっていうか、ワイルドっていうか…。ここで一つ、スッキリしといたらどうだ？戦う時も邪魔だろ、それじゃ」

「仕事中は後ろで一つに括っていたの。それに、傭兵じゃ髪の長いのなんて普通よ？」

私の言葉にミュラーはへぇ、と相槌を打つ。

「そうなのか。なんでだろうな…縁起が良いからとかか？」

「まぁそれもあるけど、お呪いみたいなものよ。昔、髪を伸ばしていた傭兵が髪の毛と引き換えに敵を倒した、なんて話が多いから、それにあやかっているってことじゃない？」

「ふぅん、そんなもんかね…。おっと、来たぜ」

ミュラーの一声で、私の心がシュッと引き締まった。手にハサミや櫛など、散髪に必要な物を手に抱えたセレ姉がやって来る。

「あら？先輩、いらしてたんですか」

「ああ、面白そうなんでな。コイツが髪型ひとつでどれほど変わるかも興味がある」

興味本位かいっ。

「ふふ。それでは、始めましょうか」

シャキン。と鳴ったハサミの音がこれほど恐怖をそそるとは、私はこの時、初めて知った。

私、入学する。5（後書き）

切がいいのでこれぐらいに。散髪するときいつも髪型をどうするか迷う。

ニーナの現在の髪型は、大体毛先が肩甲骨に届くぐらい。ただ、髪の量はけっこうある。

どんな髪型にしようかな…。

私、闘う。

「いやー、すっきりしたなー」

「ほんと。とっても似合ってるわ、ニーナさん」

散髪は無事終わった。私としては、髪を切っていく度にセレ姉もミュラーもどんどん言葉少なげになっていったことがとても不安をそそる。

…失敗したってことはないよね？

「セレ姉、鏡見して」

「…見ます？」

これ絶対失敗してるー！だからか！だからか！さっきからフォローにしか聞こえない賛辞は！！

私は手渡された鏡を、恐る恐る覗いた。そこには。

奇麗な黒髪を左右の肩から下した女の子が私を覗いていた。…うん、なかなか可愛い子じゃない。

「ねぇ、この鏡不良品？」

「いや、ビックリするのも分かるけどよ。それはお前だお前」

えー、またまたぁ。そんな冗談を。

「そうよ。ていうか、鏡を覗いているのはあなたじゃない」

えーと……？

「これ、私？」

うん、と頷く二人。そうかー、これ私かー。

「え」

「えええええええええええええええええええええ！！！？？？？？」

そりゃもう叫びましたよ、思いっきり。

「さて、武道場に行くとするかー」

「そうですね」

呑気に歩きながらしゃべる二人をよそに、私は全力で周囲を警戒していた。右良し、左良し。

「おいおい、そんなに警戒すんなよ。ヘンに見えるぞ？」

「やややヤッパリ！？私の髪型変！？」

「…意識しすぎだ」

そ、そういわれても…。

「先輩の言うとおりですよ。気にしてたって始まりませんし。可愛いと思いますよ、私は？」

うう、髪を切った張本人が何を言うか。

「あー、行ってやんな。こいつは恥ずかしがってんだよ。今の今まで自分の容姿に頓着してなかったんだからな」

顔なんて真っ赤だし。ミュラーが付け加えた一言で私は顔がかっと熱くなるのを感じた。きっと、今の私の顔は熟れたトマトより赤いんだろう。

「傭兵やって長いんだろ？きっと、お洒落する暇も無かったはずだ。ここいらで羽目を外すのも良いんじゃないかと、俺は思うんだがな」

この赤毛め。私は顔を赤くしながら二人の後を着いて行った。

「ここが、武道場だ」

私の目の前には、木造の大きな建物が建っていた。門の上にうねった文字が看板に書かれている。

「ああ。あれは東方の文字だよ。漢字って言うんだそうだ」

そう説明しながら建物の中に入る。中では組手をする者や木剣で素振りをする者、模造剣で試合をしている者など様々だ。

「ここが本館。外庭にでると射撃場もあるぞ。最近、動体射撃訓練ができる装置が入ったらしいな。俺は剣を使うから詳しくは知らないが…」

「へー、結構色々あるんだねー」

私はきょろきょろと辺りを見渡す。1，2，3…。

「ふーん」

「どうした？」

「いや、別にぃ。あんまり、強そうな人はいないなぁって」

私は思ったことをそのまま言葉にした。予想していたより、全然強そうな人はいない。良さそうなので４人ぐらいかな。

「そりゃお前、現役の傭兵と比べるってのも酷ってやつだろ。俺たちゃまだ学生だぜ？」

はっはっは、と二人仲良く笑いあう。まったく、その通りだ。ただ、そう思わない、思っていない奴がいるのもまた事実。

さっきから傍で聞き耳を立てている上級生らしき男が私たちの方へ近づいてきた。

私、闘う。２（前書き）

ＰＶ２２０００、ユニーク３１００突破！！

見て頂いた方々、本当にありがとうございます！これからも面白い話を書けるように頑張ります！

私、闘う。2

私たちに近づいてきた上級生はどうやらドイツ人のようだ。堀の深い顔立ちにサファイアブルーの瞳。少し色素の抜けた髪を短めに刈り上げている。

「おい、新入生（ニューフェイス）。さっきの言葉はどういう意味だ？」

「そのまんまの意味だけど？」

私とは２０ｃｍは差があるだろう。だけど、私は前言を撤回する気は無かった。

「女のクセに、大口を叩いていると痛い目に遭うぞ？ここはそういう場所だ」

私はその言葉にカチンときた。何？私が女ということで、文句があるのか？確かに、私は女だ。男と比べれば腕力や体力では劣る。けど、少なくとも目の前の上級生より私の方が強いのは間違いないのだ。

「そう言うなら、アンタも痛い目に遭うかもしれないわよね…？ここはそういう場所なんでしょう」

私は足を前後に開き、腕を構えて臨戦態勢を取る。上級生の男は私の挑発に乗ったようで、同じく臨戦態勢を取った。

「後悔するなよ」

「どっちが」

空気がピリッと張り詰める。だけど、私たちが拳を交えることは無かった。

ドスゥゥゥン！！！

突如、外から何か重たいものが落ちてきたような音。

「きゃあああああ！！」

そして、悲鳴と共に聞こえてきたのは、腹の空かせた獣の咆哮だった。

「な、何よコイツ…！」

私たちは外に出てそれを見て絶句した。私の言葉がその場にいる全員の言葉を代弁していた。それは巨大な狼だった。３ｍはあるだろう巨体は、自然にいる狼とはかけ離れた存在だとしか思えない。その咢に噛みつかれたら、人間なんか簡単に引きちぎられるのは簡単に予想できるだろう。

しかし、その狼は大きさこそ異常だがまだ納得できる範囲だった。これ程大きな個体はそうそういないだろうが。だが、どうしても違和感を覚えさせるものが背中から生えているのだ。

翼。

猛禽類の翼なような物が、その狼にあったのである。

「なんと面妖な…」

上級生がポツリと言葉を漏らした。そう言わずにはいられなかったのだろう。

私は、あまりに現実から離れた光景にしばし放心していたけど、その狼がぐるりと周りを見渡すのでハッと正気に戻った。

（何かを、探している――？）

一瞬過ぎった考えを取り敢えず保留にして、固まって動かないセレ姉に声をかける。

「セレ姉！周りの人たちを安全な所に避難させて！」

私の声にビクッとしてからすぐに頭を巡らしたのだろう。コクン、と頷いて同じように動けないでいる生徒たちに声をかける。

「ここは危険です！早く安全な所へ！」

しかし、狼は急に動いた生徒たちに敏感に反応した。私は咄嗟に服の下に隠していた銃を出し、撃つ。

パン！パン！パン！

私は威嚇目的で足元に3発撃ち、そのまま狼の視界に入る様に生徒たちの流れとは反対方向に走る。私の持つ銃ではただの時間稼ぎにしかならない。だから、時間を稼ぐ。

私に興味が移ったのか、はたまた違う理由なのか。とにかく狼は私を追いかけてきた。

「はっはっはっ」

私はなるべく遮蔽物を挟むように走って距離をつめさせない、が。

「あっ」

私は足を躓かせて転んでしまう。マズッ…！

私は噛まれると思って目を閉じた。…あれ？恐る恐る目を開けると、後ろ脚の付け根から血を流す狼がいた。

「まったく、突然走るから追いかけるのが大変だったぜぇ」

「ふん。もう少し考えろ。ここには騎士クラスが2人いるんだからな」

そこには、長剣を持った2人の姿があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3367x/

転生先のサーカス団は傭兵団！？

2011年10月29日19時18分発行